帰家奉呈
大人

泥路坦如砥　連朝発興奇
嚢中無可献　唯記数篇詩

せふとの君に読て奉りける。

烏羽玉の暗ハあやなし旅衣錦の袖ハかさ、さらなん

戯呈諸君

連日山々去　山中尽俗埃
仙丹不可得　空手又帰来

懐旧志終」(28)

迎子元君還自都於郡　野義比

紛々陰雨隔帰程　渡雁哀声至二更
此夜帰来高館上　挙盃先問旅中情

秋雨中集友人宅懐子元君在都於郡
長倉寛

交歓暫絶酔中仙　何事尊前少一賢
陰雨紛々古城上　揮毫時指雁行天

仝　高元吉

別後偏蕭索　窓前望眼賒
南江孤雁叫　北嶺断雲遮
夜々成塵夢　朝々慕徳華
雨中応有賦　何処駐仙車

帰自都於郡明日各持此詩見訪予不」(29)

能無感其恋々之意乃併記之云」(30)

執筆分担
解説　(田中・橋口)
翻刻　昼寐の友　(橋口)
米良の見塩　(福井)
尚白集　(福井)
二日酔　(福井)
豊の秋　(橋口)
梅か香　(田中)
卯の花　(田中)
ひとり旅　(田中)
温泉記　(橋口)
梅見噺　(福井)
(付)志濃武草　(塩谷・福井)

頻年嘗無究源客　彩霧掩翳玉宮辺
我亦名姓録仙籍　暫謫人間隠詩篇
太白縦横不足屑　壚山幽賞坐相延
為汝高鳴九皐上　更使令聲聞九天

於鶴の瀑ハその人。をやかてしるすなりけり。天離る鄙の女ハ心こわ〳〵しくて、かゝる猛き」（23）業をも為けり。さハさりなから行衛もしらぬ恋の悲しさにそ、深き思ひの渕に沈ミけるらしと昔のさま思ひやりて、

玉の緒の絶て乱る水の面におつるの滝つ水増りけり

海上行

請看海上十余程　白磧青松徹底清
不嘆前津風浪悪　久拚人世利将名

荒磯海の波こ□〳〵しく立さわくを見て、謝玄か雪の塩あんはい実にさもとおほへけれハ、

和田の原はら〻〳〵と降雪を塩といふたハ知恵の海哉

烟雨渡三方津　」（24）

即徳河也三洲牙出故曰三方津
一葉飄然伴白鷗　三洲十曲不勝秋
中流廻首唯烟雨　誰道蓬莱竟可求

狙公か昔しに引かへて朝三暮四の飢を狙に助らる〻男に行逢ひけれハ、

秋風の吹日もあるそ猿まはし

戯題酒家壁

山水勧霞盃　霞盃鼓妙才
銭嚢尽倒去　却入詩嚢来

檍か原八重の塩路ハ三筒雄の神あらわれ玉ひし所になん。松の林のさら〳〵しき中に宮柱太しき立るそ、猶神代のしるしなりける。」（25）

千早振神代の祓見きや否や問としら浪かゝる姫松

渚の清らなるに打出にたれハ、波いとあれて風冷まし。折しも遙の沖よりあま小舟の漕たるを見て読る。

海人小舟八重の塩路をこき分て出来し神の昔おもほゆ

松林晩歩

松林行不尽　岐路自縦横
西転将南折　略知物外情

奉謁

神武天皇祠

武皇者人皇第一世帝也初都于此後東征清中原乃移都大和距今蓋。三千（ママ）。年」（26）許　祠在壚東七里歳時之祀至今不絶云然未詳所立歳及土人自所竊祀乎否乎

風寒黍稷自離々　萬古　神霊有小祠
今日東遷何用嘆　皇威遠勝此都時

玉桙の道も見へ分ぬ頃、小戸の流に到りぬ。きのふよりの小雨に川波いと白ふ立さわきけれハ読る。

舟人となりてやおらん橘の小戸の川波帰りしらずも

帰路偶作

江店沽微酔　城鐘報二更
前山猶雨色　旧澗大泉声
村静驚尨吠　炬明賈客行
唯懼」（27）家室上　更愴倚門情

其(朱)故(朱)
也夫然。今日之」(18) 事豈独不然夫一于
晴而無雨未足以為奇観雨而無晴(イ)(朱)亦何楽之
有既晴且雨幽邃之趣幾不可究(ヒ)焉此即造化
所以遇予也此即予楽所以能久也猶何雲雨
之嗟焉

佐土原と財部かあわいの野を行に、犬鶏
声絶て海の音折〳〵聞へけれハ、
秋の野や絶て又聞海の音

与綾部生書並詩

僕清武之阿蒙聞足下大名欲一奉清誨者久矣今
也偶道貴国乃不揣愚劣使某氏紹介庶幾一達素
志焉而不可得意者」(19) 山川之鄙氣不得近
仙骨耳大隠隠市城蓋足下之謂也噫巴調一篇聊
訴歎々(カ)寧賜潤色頓首

山川探勝止　偶尓出城傍
是為懐君子(下上)(朱)　豈図厭楚狂
玄経知入室　青眼独望牆
更恨前途遠　無由倒錦囊

財部藩学者卒唱朱学不解文章乃曰玩文喪
志綾部氏頗脱其範囲者也故訪之

琴弾の松ハ蚊口川の西になんある。昔し
源重之、日向の守にて下りける時読る、
「しら浪のより来る糸を緒にすけて風にし
らふる琴弾の松」。」(20)
なミならハ我より来めや常滑に風に調る琴弾
の松

蚊口の浦の名ハ喧しけれと、夕暮の咏却
て静なりけれハ、
名にしおふ蚊口の。夕暮(浦の)(朱)ハかく手もたゆし寝
るもねられす

宿夏口浦

夏口江頭満岸家　相従樵父訪漁爺
主人頗嗜静中味　旅館初逃世上嘩
百里郷遙愁雨色　三更舟落対燈華
四簷猶自無晴意　間聴波濤煎緑茶

常陸てふ祝部子旅の宿訪らひ詣て来ぬ。
かたみニ古の事共こと〳〵しく語りもて
行て夜深て帰りぬ。明の日つとめて読て
遺(ママ、遺)しける。」(21)
けふよりそ神世の秋も知れける君か言の葉紅
葉しぬれハ

雨中発夏口浦

濛々前路暗　蓑笠出江村
怪此窮途者　頻蒙雨露恩

浦辺の道の果しなきに雨打しきりて、常
尋(カ)か間も見へ分ず。事問へきよすかさへ
絶て、遠路近路のたつきいと覚束なし。
かゝるふしにそ旅のおかしみハ猶深かり
ける。
我来ぬる方さへ見へず雨衣霧に煙の立そわり
つゝ

雄鶴瀑歌

距夏口浦南五里有瀑布高五丈幅三
丈怪石奇樹峨々欝々其側実(ママ、則カ)近境一
」(22) 大壮観也名曰於鶴瀑里人
曰在昔有於鶴者里中女也自投而死
故名焉予病其名不雅馴乃改以雄作

雄鶴瀑歌

雄鶴翩々下九天　王喬吹笙響凄然
知従西極崑崙至　羽砕毛飛飲醴泉
黄石赤松争保護　片雲垂翼一千年
余波遠注人間世　斟得下流便得仙

浮舟城

即都於郡也　吾藩世々所都也慶長年中移都鶴城之後小嶋津氏有之故今為墟餘不欲顯言之故□（略カ）之

城頭懐旧日　草木自相親
八陳（ママ）雲空起　百年（朱）露独新
山川雖設嶮　社稷奈無人
臣有悠然志　涙痕暗満巾　」（14）

三葉四葉ニ殿作せし跡とおもほゆるに、松のいと暗ふ生茂れるを見て読りける。常盤なる物とな云そ松か枝も過し昔の秋の色かハ

訪福崎道士不遇

道士諳古城之地理者也　吾藩弔古者必就而謀焉道士輙欣然応之惇々不倦必竭其所識而止蓋亦好古之士云

預知塵士至　採薬出山扉
凡骨難従得　白雲自在飛

鳴瀬の滝ハ城の北になんある。空蟬の世の移り来ぬるまゝに、名さへ流すなりにけるらんとすゝろに」（15）涙溢しぬ。かくはかり鳴せの滝と思ひきや幾世久しき糸の流の

浮舟城晩眺

風樹偏如浪　煙山舟恰似舟（朱）
流年長不繫　嘆息此生浮

野路のいと覚束なきに日さへ暮ぬ。何所の里の木綿付鳥聞事なるらんなと心細ふ思ひつゝけて、女郎花いさこの野辺に宿借らん我待虫の声も絶ねハ

黄昏の頃、日暮しの里潮井に詣てぬ。古き歌ニ、「日暮しや氷室の里を咏れハ潮の煙いつも絶せぬ」。里人ハ和泉式部の歌とそいふなる。かゝれハ瑞垣の久しき世より洧（ママ・涌カ）にけん、かくも猶おほつかなし。」（16）日暮しや潮の井筒いつとても絶せぬ物ハ煙なりけり

潮明神の宮守に宿を請けるか、初夜の頃にや有けん、数多の猿田彦・多力雄たち集り玉ひて、戸開の舞を為（シ）玉ふ。予も八百萬の一人と呼れけれハ、夜もすから眠もやらて、筋骨のあらふる神の一さしに天の岩戸ハ早明にけり

客暁欲雨

疎鐘天曙湿声聞　古駅褰裳酒始醺
従此紅楓三十里　頗労心曲是浮雲

潮井の北に水無瀬山見ゆ。旅衣けさしもおきつみなせ山紅葉の錦袖にからなん

偶然作　」（17）

連朝採薬去　始入赤松群
人世何辺是　四望只白雲

此日也雲雨漠々泥濘没脛山川之勝不復可（下上）（朱）究矣嗟予之不遇也自知已熟猶何望之造化哉然操心之躁不能自安悒然怨焉欝然思焉思之又思乃始得之夫春而夏而秋而冬昨日非今日今日不復可来（ヒ）（朱）天之無常亦甚哉雖乃無常春暖秋涼古今一也此天所以能久也天愛人人悪寒暑天不為之廃冬夏安在其愛之哉然財用以殖（ママ、殖カ）焉人民以生焉此天所以能愛

加納村にて、

明けりな櫓かついてぬる翁

源藤橋即事

橋以源藤名蓋中古之世源氏藤氏以此溪為疆故名焉然此固臆見姑記以備後考云」（9）

寂々長橋上　微風冷旅装
城頭月已没　始識夜来霜

登曽井城

城者　吾藩下邑之墟也

痴心憐寂寞　謾訪旧皇京
欲試悲秋色　先登曽井城

臨赤江

赤江或曰赤沢即地神氏之世所謂小戸川也源出躑躅峯未詳所經流処東流二百余里為赤江入于海

山落吟過又水村　水村尽処大江蟠
三竿日上潮煙外　一片軽舟出海門」（10）

ある谷川に里人多く集り居けるか、橋壊れたり、下へ廻り玉へと口々に罵にそ、端なくも本の道へ立帰りて、

紅葉ばやはしなく川に行あたり

郊頭即事

山田収未盡　夫女喜新晴
白髪誰家叟　相迎問姓名

屈原か昔しにあらねと、ゆく〳〵沢畔に吟して柏田の川に至る。舟遅間の朝けしきいと面白かりけれハ、

芦の穂や折〳〵響く棹の歌

山行

」（11）

栢田市至笥村山間之路名謂長篠坂蓋取其産也其為地也峯嶺重々無復他眺望然丘壑幽邃卒多奇觀亦吾徒之一大詞蔵云

行々三十里　吟思自西東
山勢多相似　秋光独不同
雲圍幽石白　樹照小溪紅
新句縦裁得　深慙造化工

女郎花の咲残れるに、あらぬ道に落たりけれハ、是なん遍昭か月代したるなりけりと、打微笑みて、

女郎花右を左へいくたひか

ゆき〳〵て岩爪に至りぬ。

名にし負ハいさや祈らん空蟬の世の憂事を岩爪の神」（12）

過黒貫寺

在浮舟城東南三里台閣巍然一仍旧新於今可見当日者独此已古曰浮屠氏能転禍為福蓋謂此也抑考之吾道可謂犬吠而狐変耳然彼浮屠氏豈足責是哉噫

午日蕭条栖鳥鳴　秋風吹満梵王城
至今蘭若台前水　注去蓮荷一段清

大安寺奉謁

桂円公墓

吾藩之先君諱義益墓在寺之後苑

弔来池畔寺　孤墓（朱）立荒庭
悲氣三秋溢」（13）徳音百世馨
心将衰樹赤　松入旻天青
跪坐蒼苔上　潸然涕泗零

都於郡の町にて人に答へける辞の、句になりて、

新酒や名酒（所朱）古跡を飲あるき

志濃武草

南陽　安井正子元　著

文政三といふ年、都に物学にまからんと思ひ立事侍り。三年の思ひ出に都於郡の古にし跡見てんと、長月の晦日はかり、散はつる紅葉を幣と手向て立出けるを、多の大人達詩・発句もて馬の餞し玉ふをこゝに記して家路の錦とハなしぬ。

南陽君都於郡の旧跡を探り、高鍋辺に風雅の友を訪玉ふを送り奉る。

帰り待ん野山の錦とり揃へ　史稽
や、寒し重ね着玉へ旅ころも　垂瓠
こゝろみに雁の音もきけ旅の暮　士誠」(5)
詩作りて送れる菊の名残かな　水哉

奉送安井子元君遊都於郡　野義比即水哉

河梁風意冷　強勧両三盃
月色沈々没　秋声寂々開
今朝遙別去　何日又帰来

預識途中景　応誇宋玉才

仝　平易直

良明尋勝出扃関　銀。西流漏響間（漢（朱））
行色冬迎荒駅外　離情暁冷古松間
浮舟城上雲如浪　双石峯頭月似環
四望佳光顕画骨　題来北嶺与南山

仝　長倉寛」(6)

瓢酒三盃一笑歓　変成離恨酔吟難
高山北擁風声勁　片月西沈水色寒
分手路傍紅樹動　挙頭城上白雲残
不知仙跡何辺是　別後蕭條向晩看

仝　長安信

親友今朝赴古城　河梁自発別離情
唯期他日君帰日　花立台辺置酒迎

仝　湯貞固

無限清霜路　間行不暫留
雁飛平野外　煙起峻峯頭
初日紅楓映　凄風碧水流
共傾離別酒　執手思悠々

病中聞子元君遊都於郡寄此以奉送」(7)　高元吉

別路難携手　病中恨更多
寒雲迎杖霄　巴曲為君歌
紅樹知成趣（応（朱））　彩毫寔奈何
正知錦嚢裡（ヒ）　到処貯烟波

送弟正遊都於郡　子樸

共酌如渑酒　別筵一笑看
暁光穿戸隙　秋色溢雲端
門外時求杖　江頭寔濯纓（冠（朱））（ヒ）
縦為三日望　行矣莫盤桓

二十六日の月や、上る頃、杖笠取出て、家の大人に読て奉りける。

別としいへハけさたに悲しきに三年の秋そ思ひやらるゝ

戯留別　家兄及諸君」(8)

常道愁凡骨　凡骨何足愁
蓬莱我収到　常使伴仙遊

花立に至れハ、海の音いとこハ〳〵しく聞へて、横雲の隙より朝日ほのめき出ぬ。是なん国の名の由縁なりける。

日に向ふ民の心しまめなれハ君か恵そ照まさりける

付・志濃武草

同じく安井文庫に収まる、安井息軒自筆の『志濃武草』を、全文翻刻して付載する。外題・内題「志濃武草」、序題・巻尾題「懐旧志」。現形態は、

一帖の折本であるが、原本は一巻一冊と思われ、その各丁を二葉に分つて、一面に一葉ずつ貼り込んだもの。表紙共三一葉。原本のサイズは二〇・八センチ（縦）×一四・一センチ（横）、表紙は灰青色、題簽は左肩。兄、清溪安井淳子樸の序（文政三年九月）あり。内容は、大阪の篠崎小竹への入門を前にした二十一歳の息軒が、その旅立ちを前に、飫肥藩の旧址都於郡（現宮崎県西都市郡於郡町）を訪ねた折の紀行記念集。旧跡に立って懐旧の情にひたり、雅友に交って贈答があったが、詩・和歌・俳諧と多様に使い分けるその様式は、疑いもなく父滄洲の影響によるものである。

翻刻）

志濃武草（題簽）」（表紙）

懐旧志序

今茲庚辰之秋家弟正遊于都於郡于夏口其間所得詩歌若干首名曰懐旧志請題言簡端予乃謂之曰名者実之標也名而違実不可以為名也夫都於郡者

吾藩之墟也而汝臣隷也臣隷而遊其墟想旧事而視今日誰能不発」（1）桑滄之嘆哉汝之名此篇意蓋有于茲与乃繙閲之城郭台榭巍然於当時松栢荊棘蒼然於今日宛然尽在焉予乃慘然悲焉喟然嘆焉潸然涕泗交頤猶身自逍遙彼地矣苟覧此者誰能不興懐於彼哉名之与実稱蓋此之謂也正之名此篇意必有于茲矣哉」（2）

文政三秋九月清溪安井淳子樸序

（余白）

」（3）

」（4）

西へ廻り東へ廻り梅見かな

吟賞する内、六十はかりと廿はかりの人、童子に」（4・オ）行厨荷せて来るを問は、六十はかりの高鍋の山口某、廿はかりの人ハ本荘の寿山といふ誹人にて、ほ句書けるか、いまだ佳境に入しとも見えす。漸ありて暮近ふなりぬれは、梅か香匂ふ袖ふり立て」（4・ウ）毘沙門寺に立帰りけるに、甚ふ労けれは、宮鶴の酒店に微酔を買て、やう〳〵庭前の景も朧なる頃、毘沙門寺に到る。寺僧のあるし設け大方ならす、二更も過けんと思ふまて」（5・オ）酒酌かわし酔臥ぬ。

宿毘沙門寺

孟春尋勝地　一宿梵王城
黄鳥来何処　早朝醒夢鳴

山寺や経よむ鳥に起さるゝ

晴昔の夜の酔も醒さるに、復酒をすゝめ玉へは、数盃」（5・ウ）を交えて暇を告、寺を出て吟行すれは日已に午近く、富吉を去、柏原をゆく〳〵、

我酔た姿を山も笑ひけり

大塚村にて、

長閑さや村広〳〵と歌の声

赤江川の堤より詠やりて、

春水の満て忙し渡し舟

中村町近き畷行けるに、うかれ女と覚しか若葉摘居けるを見て、

うつ向て物思ひけや若菜摘

二日路の労休んと中村の」（6・ウ）酒肆に杯を弄て、

暖な中に居えけり壺一つ

酔の力に助られて、初更の頃帰ける。

梅匂ふ袖を故郷の錦かな」（7・オ）

此輯ハ拙き事のかす〳〵なれと、親しき人の梅見噺聞玉ハんに、忘たりと云んも本意なけれは書しるし置ぬ。

文政五年壬午閏正月

滄洲記」（7・ウ）

重陽日霽照青袍　景美脩途不厭労
何用竜山故催会　行々幾処(度)自登高

けふハ重陽の佳節なれハ、野路を」(13・オ)
行〳〵茱萸を挿て故郷に帰るそうれしき。
国に帰る税ひや殊に菊の酒　　滄洲

文政三年庚辰之秋九月

稽古堂

滄洲記焉」(13・ウ)

跋温泉記

豐城之劒必待延伴而合其地然也二大人已得其地其竜徳之発亦不足怪焉爾夫既発之雖潛(下上朱)而伏(ヒ朱)矣(朱)亦孔之明(昭朱)吾恐此記亦入張華氏之匣也

文政三年秋九月

二男(正)題」(14・オ)

一〇　梅見噺

梅見噺」(表紙)

文政五つのとし後の睦月はしめの九日、月知梅見に行んと、史稽・智等の二君に従ひ杖を携え門を出れは、長子裕高貞甫別を送り詩を恵み玉ふ。塚の下に行、鶯の初音を聞て、」(1・オ)

贐にはつ音送や金衣鳥

瑞雲寺を訪ひけるに、くさ〳〵もてなし玉ふ中にも、庭前の紅梅を愛て、

菓子台に香を盛交つ紅の梅

大塚村を行けるに、医師と覚しき人竹輿にて行」(1・ウ)過けれは、

駕て海を渡や八重霞

千丈越に休て、

梅か香に腰を掛たる峠哉

浮田の茶店に休て、

長閑さを茶飲咄や婆二人

柏原を行て、

梅か香の中に富けり一在所」(2・オ)

程なく毘沙門寺に到り、見るに屋後にハ岩岸高く聳えたる下に泉水深く湛え、紅梅の色を浮め、赤松の影を浸して最奇麗也。

池水の温むや扨て魚躍る」(2・ウ)

今宵の舎りを約して、高浜に趣きける。行は行先や野の梅薮の梅

香積寺に到は、月知梅今を盛と咲ぬるそうれし。

久堅の月しる梅にさそわれて言葉の花も咲出にけり」(3・オ)

天津空暮なは暮よくるとても月しる梅の影に宿ら遊ん(ヒ)

題月知梅

梅樹山中梅樹奇　孟春花発擅芳姿
経歴幾年人不記　唯聞唯有月明知
苔封土護盤根大　清麗東西南北枝
東西」(3・ウ)南北耽幽賞　徘徊且唱林逋詩
疎影暗香時泛酒　謾使吾徒弄玉巵
夜をかけて見たし月しる梅の花

利々しけなる小女の追付けれハ、名を問けるに「末松」となん答ける。なへて此国ハ古風残て、かゝる名の多かりける。夫より浜の市・小村・川尻・小川を経て敷根に到れハ、痛くこうしにたるまゝ草の上に休ミ、

草卧て草の錦を敷ねかな　、

福山も程近けれハ、「いさ行て休ミなん」と伴ふ人々の辞の杖に扶られて瓶わり坂をこえ、福山の旅亭に行嚢を卸しけるに、此所の年寄役饗饗の酒宴に、鄙ひたる妓女の絃哥喧しく、旅寐の夢も結さりける。三更の頃酒宴終り」（11・オ）妓女も「お花下されし」なとゝ礼云捨て帰けれハ、

年寄衆もてなすふりの若けれハあの芸子さへ高うふく山　史稽

福山の福を戴く嬉しさを云わぬ色なる山吹の花　滄洲

福山の町頭より上る坂中の茶肆に休ミ、桜しま鬘鬟く烟うちなかめわれも烟草をふく山の茶屋　、

福山の牧ハ渺々として、牡牝三千群る中に、一条の大なる野路に歩を拾ふて、都城を詠めやり、

一面に唯真白也蕎麦の花　、」（11・ウ）

やゝありて都の城近く鶏の声聞えけれハ、「遠方に夕つけ鳥の声す也いさその里に舎りとらまし」と古歌を口号て、都の城に舎りとりける。一間にハ志布志の人宿り、一間にハ妓女ませに酒飲けれハ、

一間〳〵替や長き夜の嘶　、

朝またき都の城を立、高城を経て窟加納に宿る。あし曳の山里最淋き燈の下に蹲り、「暮てこそ人住庵もしられけれ片山陰の窓のとほし火」と言ふ古人の歌なとおもひつゝけて、

秋深き山下庵に旅寐して光寒けき夜半のともし火（ほ）　、」（12・オ）

去川の関にて、

関守の面ふくれけり秋の風　滄洲

山行　、

客路秋光冷　行々遠傍山

露多紅樹濕　風静白雲閑

留杖遙臨谷　棄繻忽出関

窮途何足哭　佳景解愁顔

従山下村到高岡舟中作　、

十里河流疾　舟中眺望忙

清吟猶未熟　忽尓到高岡

高岡の茶店に休ミける。〔直〕（朱）に関悦子帰り玉へとも、史稽君と予ハ老の労れ甚く、あすこそ帰るへけれとて関悦子に別れ、予ハ安藤氏を訪ひけるに、茶よ酒よ饗饗し玉ひて」（12・ウ）「旅路の咄も聞（ま）（朱）もほし（ヒ）けれハ是非に一夜」と留め玉ふを辞（ヒ）して、史稽君と同し逆旅に投しぬ。初更の頃、誰か家とも知す月の光に横笛の声聞えける。

高岡逆旅聞笛　、

客亭（朱）秋夜静　横笛両三声

回首高楼上　関山月色明

粟野の宮に詣て、

草も木も神の鏡や露の朝　史稽

九日途中作

の」（8・ウ）人に伴ひ。国分の小野与衛門
てふ孝子ハ予かしる人なれハ、帰にハ尋
んとおもひ、その人の事問ふに、はや古
人となりしよし答けれハ、死者の再逢か
たきを感しつゝ脇本に到る。此町よりハ
名に高き白金坂也。痛う労れて越へくも
あらす。里人も「是よりハ海路も近く、
殊更風静に波穏なれハ舟に乗玉へ」と云
ふにそ、「陸あらハ舟にな乗そ」とよみ
しむかし人の言葉に負き、一葉の軽舟に
駕しける。

従脇本到鹿児島舟中作　、

日晴風静旅情寛　一葉軽舟渡碧瀾
桜島雲烟銀嶺樹　行々総作画図看

桜島を望て、

さくら島紅葉の秋も勝れたり　、」（9・オ）

鹿児島近き磯辺に磯と云ふ景地あり。「国
の守の別荘にて満山桜を栽たれハ、花の
時ハ詩歌のたのしミ管絃の遊賑し」と咄
聞ツゝ鹿児島の津に着くに、琉球船も数
多見えたり。軈て岸に上り、逆旅に草鞋
の紐を解く。故郷の人此二年はかり此地
に商ひし居けるか、今宵酒肴に妓女を携
えきたり、吾徒の旅情を慰めける。

長き夜の長きもしらぬしらへ哉　滄洲

砧聞た耳怪ん歌の声　、

竹の縁・菊の露なと云ふ曲を歌ひけれハ、
糸竹の゛んにつなかる一ふしをきくの露にそ
齢延けり　、

明れハ城下を一見しけるに、山を負ひ海
を抱きて、長を絶短を補ハゝ、方半里」
（9・ウ）はかりもと見え、邸宅市廛縦横に
連綿たり。

遊南林寺　、

釈氏今非釈　驕奢委俗塵
可憐仙仏宅　丹漆惑愚人

福昌寺・琉珠館なと見て造士館に到るに、
けふハ官史の来るとて入事を許されハ、
中山王の奇附し玉ひし仰高門より窺見る
に、門内に泮水橋あり、その傍に堂あり
て、講堂の二字を掲たり。其余ハ見えさ
れハ人に問に、「其内に入徳門ありて石
たゝミ清らかに、また一つの〔小〕門ありて
奥に聖堂立玉ひ、春秋の釈菜厳重なり」
となん云ける。又馬場を隔て神農堂あり、
医師の学館なるよし。其外あら〳〵」（10・オ）
見まわり旅館に帰る。

鹿児島　滄洲

千里雄藩百世封　地霊家富瑞。濃
歳時来聘琉球島　雲霧昭回宝字峰
俊士居宦官宣美政　佳人満市擅嬌容
何愁此土非吾土　如是繁華不易逢

四日午過る頃、鹿児島を立て吉野の坂を
上る。萩の花の露を含ミ、薄の穂の風に
靡くを愛て、菖蒲谷・関屋の里をすき、
白金の峠に到る。

斯はかり高き峠や秋の晴　、

白金坂の嶮しさを語つゝ、辛うして脇本
の駅に到り宿す。

稲積た中にも旅寐すれハする　、

小田越まてハもと通し道を通り」（10・ウ）

小田村の口より右に折て浜の市に到らん
とする。跡より年の程十はかりと見えて

或去或来多少客　不知誰是故郷人

湯けむりや霧立上るまつ柏　　滄洲

婦人の浴するを見て、

浴した肌をてらす紅葉哉　　〃

偶作

四面群峯合　挙首唯見天（頭）（朱）

傍溪連陋屋　接筧引温泉（ヒ）

自作山中客　恰如洞裏仙

浴間為底事　日賦望郷篇

けふハ天満宮の祭なれハ、

春ハ梅咲や湯本のうす紅葉　　史稽

神垣に捧ん梅のはつもみち　　滄洲

故郷の人の帰るよすかに文頼て、

恙なく故郷に届け雁の文　　滄洲

浴衣にも仕たきもみちの錦哉　　〃」（7・オ）

山ハ屏風画か如き紅葉哉　　〃

さらてたに淋き旅の舎に、雨のふりしみけれハ、

山深き軒端に秋の雨添てしのふにあまる旅の淋しさ　　〃

偶作　　〃

日州辞去到隅州　欲浴温泉此滞留

間笙看山空向夜（ママ、坐カ）　微吟憶国益悲秋

溪流聒々醒残夢　風樹蕭々襲敝裘

疎雨何来西牖下　寒燈一点対吾幽

色替ぬ高根のまつや旅の友　　〃

將辞栄尾題客舎壁　　〃

朝浴温泉罷　振衣忽欲辞

慇懃山与水　須待再遊時

心あらハ又くる秋を待ぬへし」（7・ウ）尾の上のまつも谷の流も　　〃

温泉の山を立、林玄貞君に留別して、

紅葉してまたの秋にハ言伝よ　　史稽

留別鹿児島林玄貞君　滄洲

丈夫相共浴温泉　我去君留互黯然

多日交情如淡水　今朝別恨似深淵

各居曽有関門隔　同調豈無書札伝

帰意匆々難酌酒　河梁任筆贈詩篇

温泉の山の逗留も長月の朔日を限り、彼是の調度とり収め、数日親しミし人〳〵に別を告て、旅衣辰の頃客舎を辞し、是より隼人の薩摩州鹿児島の府にあそはんと山路を行に、雨降霧深ふして四方のけしきも見分されハ、

山〳〵ハ皆島〳〵や霧の海　　滄洲」（8・オ）

横瀬に到れハ雨歇ける。喜晴の詩作らまほしきも坂道に脳（ママ）され、〔空（朱）く〕行々てある野中の一ツ家に休らひけるに、女郎花の媚き立、鶏冠花の色深く咲たる中に、老饒ふたる女の最ねもころに茶を煮て与えけれハ前途を問て立去ける。松永の里よりハ坦路なれハ安〳〵と清水・内村を経て國分の正八幡に詣てける。うち日さす宮柱大しく立て、瑞籬の久き世を守り玉ふそ貴き。

紅葉する中より朱の鳥居哉　　滄洲

今宵ハ神門の前なる市店に舎る。あるし国分烟草の咄しけれハ、

車田や火廻りのよき若烟草　　〃

小田越・龍口越こえて、加治城より国分

穿烟帰鳥去　隔水遠砧忙
不啻窮途哭　秋光自断腸　」（4・ウ）

新村をたつて、野尻より山道伝ひ猿瀬坂・越村なとを過、高春の宿に早く着ければ、

立出て野尻山路猿瀬こえ少し泊ハ高春の町　史稽

高春ハ大なる溝ありて、家毎に水碓を設け、奴婦の労を助しむ。今夜ハ此所の客舎に草鞋を脱けるか、砧の声に眠もやらぬまゝ発句をつゝりて、

淋しさの拍子揃る砧かな　滄洲

東にも搗はしめたる砧哉　〃

祓川より八丁の坂道を上りて、東霧嶋に詣ぬ。宮殿弥高く、老樹古久たり。広前に額突て、

尊さよ風も身に入神の森　史稽」（5・オ）

柏手の音澄にけり秋の風　滄洲

錫杖院ハ誌公の錫を留し地にハあらねと、庭前の眺望かきりなし。山中の緑池藍を湛え、山上の紅樹錦をつらねて、百里の佳景此寺に集る。

秋風の吹はらしたる霧島の山のかいある詠めうれしき　滄洲

錫杖院即興

霧山仙路嶮　凡骨自難攀
纔到花宮上　飄然出世間

小池通を行〳〵、霧島山を望て、

霧島やきりに隠つあらわれつ　滄洲

蔦楓しけりいとくろう細き濘道を行なやみて、木の葉打敷休ミ居ける」（5・ウ）に、人來りて「かゝる道ハいかてかいまする」と云ふ。こハ業平朝臣のす行者に逢たりし宇津の山のけしきに似たり、誰ならんと見れハ、高岡の黒江・市来二子なり。暫く物語するに、日たけて行先猶覚束なけれハ、東西に別れ、あらそと云ふ所に到り、賤の家に宿る。

終夜きくや四壁のむしの声　滄洲

西霧島に詣てける。宮殿美麗にして老杉森〳〵たり。奉納の誹句を見るに、国分の快風舎雅松か句に「陽炎や仰は高し千穂の岑」とあり。橘南溪子か『西游記』にも「高千穂ハ霧島なり」としるしぬれハ、此山を云ふにや。

山高き宮居に霧の海深し　滄洲（史稽朱）」（6・オ）

西霧島山偶作　滄洲

躑躅山高接九天　神祠仏閣両巍然
探勝徘徊老杉下　竹杖携来采薬仙

本坊華林寺をはしめ、寺〳〵見おわりて栄の尾の道にかゝる。湯の野と云へる所に新妙礬湯あり。茶を乞んとてある家に立寄けるか、庭にハ泉水を湛えて錦鱗游泳し、床にハ文箱二つならへし側に一面の琵琶あり。軒端の楓の色を催し、垣根の菊の綻ひかゝりしにも、あるしの風雅しられなから、留主なれハそのまゝ立さり、山坂をこえて亭午の頃栄の尾に着。湯守鵜木氏に逢て逆旅を定め、飲食の器なと調え、まつ山路の泥洗ひなんと温泉に浴しける。浴客多くうち交りぬ。

栄尾客舎作　滄洲　」（6・ウ）

温泉活々気如春　一浴清然洗俗塵

霧迎行色霽　月照去途垂
吟思乗幽疾　別愁引歩遅
先生」（2・ウ）遠尋景　帰国是何時
仝　長祐之（倉寛（朱））
今朝祖席意何云　唯見前途積翠分
古駅秋深猿瀬水　洞天路暗霧山雲
葛巾帯露装行色　藜杖引烟出俗氛
更抱名師鴻鵠志　時乗鶴背伴仙群
仝　高元吉
遙聞千里外　道路総風流
滄海連三島　霧山峙九州
温泉迎客処　暁月掃雲幽
彩筆賢師興　翩然賦遠游
仝　湯貞固
翩々征馬自難留　百里関山引雅遊
盃酒倶傾離席上　鴈声空送白雲秋
奉送家君遊霧山温泉　安井淳
路廻老虎入羊腸　百里行装引興長
浴去」（3・オ）泉源温気熾　探来石室道書蔵
嚢鍾秋色新篇美　盃挙夜光甘露香
縦是仙游飛脚健　白雲深処慎風霜
仝　安井正
斯行不是管行蔵　謾逐清幽出国疆
小子何堪違玉杖　神泉嘗欲洗腐腸
驚羊峰秀千年槊　真鷺原荒八月霜
到処知応多感慨　好揮華筆照邦光
予も黯然として筆を揮ひ、
留別諸君　滄洲
欲賦秋光美　出門遠勝游
勝游纔一月　何作別離愁
是より野路の萩山路の紅葉に杖を曳て、萩を杖もみちを笠の旅路哉　滄洲
高浜の月知梅の下ニ飼喰ひ、高岡川に」（3・ウ）棹し、安藤氏を訪ひける。道草にとて烟草恵ミ玉ふ。けふハ紙屋の関まてと志しけるに、浦の名の野道踏まよひ、右よ左よ云ふ中、はや日も暮近きに、枯まつ坂の九折を攀て勞れも大形ならぬのミかハ、烏羽玉の夜ハ行へくもあらねハ、新村と云へる所のあはら屋に宿り求ける。あるしの男たゝ一人なるか、此ころ病の床を離しとて、手巾もて頭をしはり膝を立たるにそ、あしのかり寐の一夜を明し兼ける。
虫の音や旅の恨を知やうに　滄洲
宿新村
蕭然林下宅　残燭放寒光
枕上郷情集　益知秋夜長
紙屋の関守に紙を贈りて、」（4・オ）
千早振かみ屋の関を守る人に紙をおくりて仏とそなす　史稽
しら川によミ声似たるしら紙をおくるせきにも秋風そ吹　滄洲
戯言云ふまに雨降出けれハ、笠打覆ふて雨か谷に到り、賤の家に雨舎りし柿喰ける。
柿喰て晴をまちけり雨か谷　滄洲
猿瀬川に航し、猿瀬坂を這上りぬるハ、さなから猿に似たりなんと、
萩を攀蔦を攀けり猿瀬坂　滄洲
村路晩歩
悲風吹万里　蕭瑟晩声長
前後唯衰樹　東西総異郷

曽井・源藤・加納の村々を過けるに、いつこも麦秋の真盛を詠めて、

麦秋を咄す翁と翁かな

前より紙の数々書記せし」（14・オ）如く、茶店に杖を留めてハ腰を摩り、酒肆に履を脱てハ足を休めぬれハ、漸初更の頃帰り着ける。

四五日の労休る煮酒哉

文政二年四月　　稽古堂主人　滄洲記

」（14・ウ）

九　温泉記

温泉記　　」（表紙）

温泉記序

夫有勝情而無勝具則雖有山川之美不可得也若其有勝具而文献不足則雖有山川之助又不可得也蓋山川待人而為之助人得山川而為之美山川之観亦難哉非得山川之難得人之難也頃者温泉記者成焉即史稽君與家君所著者也就而読之詞華秀麗筆鋒成陳不啻尽山川之美乃又能使読者如逍遙於山川之間於乎可不言山川得人々亦得山川乎矣家君命予令序之予小子固無言之可発去」（1・オ）而不能乖応声之教聊為此言謹冠巻首云

文政庚辰秋九月　　男淳謹撰

」（1・ウ）

温泉記　　滄洲著

予久しく腰の痛に脳ミ（ママ）ぬれハ、隅州栄の尾の温泉に浴し、兼てハ山川の佳景をもさくらんとほりして、ことし文政三の年辰の葉月中の九日、籬の菊のひらくをも待す、釣瓶とられし朝顔の咲殘たるをも見捨て、旅衣の裾を褰け、草鞋の紐引むすひ、史稽・関悦の二君に随ひ、門を出る。

案山子しやと皆わらひけり旅姿

親き人〳〵河梁の別を惜ミ、り玉ふのミならす、種〳〵の玉ふを爰にしるす。

史稽・滄洲二先生の温泉に浴り奉りて、

温泉の山や薬堀（ママ）へき峯もあり

史稽君を送り奉りて、

君来よと錦してまつ山路かな

気の薬とも見送れる月

暫とおもへと月の名殘哉

山路わする、ひや、かな風

薬湯に身もくつろけよ旅の月

滄洲君を送り奉りて、

家土産に道の記給へ萩す、き

霧しまの秋ハ雲井の游かな

足とりも軽きとをちや秋の風

家君に杖を奉りて、

す、き尾花隈なくお供仕れ

奉送滄洲先生之薩州

千里秋風冷　沈々白露滋

鳴らしければ、

鉄の響逞し夏木立

綾の郷士、大始良氏は」（8・ウ）双鉤の字に妙なるよし。尋けれと他之なれハ本意なくも逢さりける。夫より綾の里処〳〵見廻りて、

山里や若葉の花の綾にしき

かねてハ法花嶽にも登るへく思ひしかと、」（9・オ）老のつかれ堪かたけれは止ぬ。

望法花嶽一名紫雲山

紫雲山上白雲齊　老去難登万丈蹊

遙見和泉式部跡　琵琶音絶晩猿啼

是より守永に到らんと」（9・ウ）歩を拾ひけるに、いたふ労れけるまゝ、河端の叢に休ミ、処々の口号なと書居けるに、五十はかりの女、畚を荷ひ通るを見て、かはかり足の健さよと羨しくおもふ内、すてに暮に薄りけれは、」（10・オ）

久堅の日影もすてに呉竹のよるの舎りハいつくなるへき

と云捨て、守永に到り舎り求けるに、則五十はかりの畚荷ひたりし女の家にて、いとねもころに挨拶しけるも、貧しき賤の住居」（10・ウ）なれハ、あしの一夜の夢もいふせく、むかし蕉翁奥羽の境なる封人の家に有りて、

蚤虱馬の尿する枕本

といわれしまておもひ出して、

明やすき夜とハ思ぬ旅寐哉

朝またき守永を立て」（11・オ）本荘に到る。爰にハ伯牙か琴の音知る人も多けれと、かはかり労れたるにハ応対の礼も煩しと訪ハす、茶店に腰かけ酢喰ける。

酢喰ふて咄や主人相知らす

六日町の東なる坂を下り」（11・ウ）けるに、丈人の篠を荷へるに逢り。金崎の道問けれは委く教るに随ひ行々、麦秋の気しきを見て、

麦秋に昔男も出たりけり

程なく朝倉寺に到れハ、はや日中の鐘撞ける。」（12・オ）

寺淋し釣鐘草の昼最中

途中吟

荒径従農父　飄然歩晩風

水村又山郭　総在麦秋中

柳瀬の町に休ひ、渡し舟待ける折しも、蜀魂の鳴けれは、」（12・ウ）

渡し呼声止にけり蜀魂

跡江村を行けるに、賤の家の籬の下に、芍薬・杜若、色を争ひ咲けれハ、いかなる人の住やらんと立寄見れに、あるしの女房と覚しきか麦秋の忙ハしきも厭す、いと快く」（13・オ）茶よ菓子よともてなしける。

礼を云ふ唇匂ふ新茶かな

小松の町を過、大塚の堤を行けるに、故郷も漸近くなれは、

故郷や新樹の色の美しさ

帰路口号

多日騒遊客　緑堤乗酔還

早行将晩歩　漸見故郷山」（13・ウ）

今江の酒店に酒飲折ふし、郭公を聞て、酒一壺飲尽しけり子規

夏木立出れハ海の広さ哉　洲

鳥鵲の舞立にけり漁父の歌　同

百日の逗留も名残ハ猶惜かるへしと、別をつけけれハ、遠く送り玉ふ。

幾日居ても名残ハ尽ぬ杜丹哉　洲

留別久成師　南陽　」（18・ウ）

世累終難脱　空辞陋巷幽

淡交無遠近　何用問離愁

美々津訪一乗院　滄洲

老夫携杖遠吟行　緑水青山迭送迎

今日逢君如旧識　一時忘却故園情

同　南陽　」（19・オ）

相尋幽士宅　不必有山中

喫茗饒佳興　高吟対美風

再心見の茶店に休て、

二度来れハ二度美しきかほよ花　洲

浪花酒よしかあしかハしらねともまつ一盃ハこゝろ見の茶や　陽

名貫川を渡り、高城の道にかゝる。かきりなき広野に、並松の一すじ」（19・ウ）あ

る中を行けるに、往来もたえて最淋し。

芋植る男立けり広野原　洲

馬叱る声ハいつこそ夏木立　陽

唐瀬原の一つ屋に休て、

かんこ鳥啼や野原の一軒屋　洲

有田村の白髭宮ハ一里はかりと、人の教へに力を」（20・オ）得て歩を進めけれと、

うらふれたる足にハ遠く覚て、暮近き頃にそ詣てける。

木々茂る中に尊き宮居哉　洲

額つきし心も清く成にけりちり吹払ふ庭の神風　陽

今宵ハ宮居近き家に」（20・ウ）舎りけるに、

里人の通夜しけるとて、夜もすから歌ひ

笑ふ声に、旅寐の夢結ひかねける。

蚊の居らぬ山家嬉き旅寐哉　洲

宿有田村　南陽

小鑾山下一孤村　十里青原遠俗喧

吟嘯終宵眠不得」（21・オ）好将明月対清猿

杖の銘

古里を出にし日よりなよ竹のよゝにあまれるなさけ嬉き　陽

早行　南陽

瀁々原頭露　塵埃一洗清

柳楊遙接眼　山水総関情

景満閑中記　興忘世上名

彷徨君莫怪　無意問前程

高城ハ古戦場なれハ、村の翁に昔の事とも問て、

古城の兵粮なるか麦はたけ　洲

高城覧古　滄洲

首夏吟過古戦場　村翁対我説興亡

可憐昔日金湯地　四顧蕭條麥隴黄

八陣図荒是一時　騒人弔古謾吟詩

当年勇士今安在　松下空留墮涙碑

」（21・ウ）

飛将出師天正年　虎争竜戦動山川

浮雲猶帯旌旗色　日夜翩々古壘辺

同　南陽

高城原上道悠々　往事如雲」（22・ウ）物色愁

幾処鯨声風入樹　数群降幡竹廻丘

覇王雄略荒営在　侠士芳名清水流

山叟従来不経意　閑歌相和望烽楼

」（22・オ）

夏経よむ声も小さし日暮前　洲

新町の佐藤道済子を訪ひけるに、悦ひの色面ヲにあらハれ、雅談を催しけるか、市中の喧しきを逃んとて、酒肴を携へ片岡民子の宅に伴ハれける。

犬の子の走リこミけり麦はたけ　洲」（14・オ）

片岡氏酔後作　滄洲

騒人愛幽僻　卜築大河潯
不見風塵色　唯聞雅頌音
屋前開麥隴　門外対松林
交会天将暮　把盃惜寸陰

同　南陽

陋巷偶相過　閑々緑樹阿
山川風物富　詩酒興情多」（14・ウ）
談道憐狂簡　披襟対蘿蘿
絃歌非所慕　四壁足鳴蛙

月夜渡富高川　南陽

雲散江頭月色新　漁舟一片水如銀
閑々吟過山多少　自怪広宮寒宮裡人

十五日ハ延陵の勝地に遊んと、朝とく財光寺村を立」（15・オ）つ。川に到り茶店に休て、

煮売するあたりに匂ふ花柚哉　洲

伊賀田にて、

ほつ〳〵と麦打家の暑かな　陽

観延陵侯泛舟赴東都　滄洲

千騎東行逑職年　渺漫河水泛楼船
預知万国観風処　不譲延陵季子賢

同　南陽

錦帆綾幕勢翩々　欸乃歌中下洪川
万里会同無鼓角　臣民共祝太平年」（15・ウ）

今山八幡に詣て、

有難や神垣にきく蜀魂　洲

登恣眠亭　滄洲

夏日相尋梵帝宮　高亭卓」（16・オ）爾接蒼空
城楼市井還山水　総在騒人一望中

同し所にて、

こし方の山と川とをかそふれハふる里遠く成（虫損）にける哉　陽

宿平原　南陽

二更人語少　四壁自蕭然
唯有濤声在　幾回驚客眠」（16・ウ）

見赤松有感　同

茂徳庇青草　高名号赤松
封侯非我事　只是逐仙蹤

土々呂の辺を行けるに、いたく雨ふりけれハ、ある家に休うて、

麦藁の雨にふすほる漁村哉　洲

同し所にて、人の雨に濡て」（17・オ）行を見て、

うかれめの身をしる雨にあらね共しつほり濡て通る旅人　陽

再宿久成師隠居　南陽

信宿林間室　松門絶送迎
暮朝詩与酒　認得故人情

富高雑詩　同

終朝閑歩富江浜　万象清」（17・ウ）和似九春
潮落洲頭漁叟満　舟過林外浴鳧馴
勝光多処為新句　佳興深時憶故人
不嘆郷関従是遠　敢将盃酒侍慈親

久成師、日々に興を新にせんと、けふハ海辺に伴ひ玉ひて、漁父の業を」（18・オ）見せ玉ひける。

金か浜の茶店は、磯の浪庭に砕ケて気しき面白けれハ、暫休らひけるに、いとなまめきたる」（9・オ）うかれ女の茶くみけれハ、

磯の浪よるひる客のうかれきてつかいはたせる金か浜哉　洲

行々て財光寺村に到る。この所ハ久成師菟裘の地なれハ、幽栖をたゝきけるに、履を倒にして悦迎へ来。庭のけしき静にして」（9・ウ）若楓・玉椿なんと植たる石台三つ四つすゑならへたり。竹の籬家を繞り、苔の径隣に通ひ、木々の若葉の軒端につらなるまて、真に浮世の外とそおもハれける。

茂る木の世を隔たる庵哉　洲

麦秋にかまハぬ草の庵哉　洲」（10・オ）

次久成師隠居　滄洲

幽居古村外　留滞楽余年
四壁紅塵遠　千株緑樹連
煮茶時偶語　撫枕或高眠
此処宜招隠　何求洞裏天

同　南陽

苔逕無俗客　夜景入窓清
月底収山色　風前足浪声
放歌狂士意　許酒故人情
閑適渾如是　悠然不識明

けふハ久成師に伴ハれ、童子に行厨荷ハせて、細島の佳景を探りける。

海蘿干す浦の笘屋の夕日哉　洲

港口のけしきを見て、

檣も添ふや港の夏木立　洲」（11・オ）

是より八幡宮に詣てける。この宝殿にハ、天叟公露ハをきの玉詠納れるよし、久成師語り玉ふ。

神もよみ玉ハん海の夏けしき　洲

宮の後にハ、天叟公の尊墓ありて」（11・ウ）「天叟幸公」の四字を雕たり。左右に二つの石あれとも、文字なけれハいかなる人のしるしや知かたし。嗚呼かゝる尊き君の跡さへ年ふり世久しけれハ、誰弔ふ人もなく、塵打積りたるそ、いと悲しく覚ける。」（12・オ）尊しと御墓を守る新樹哉　洲

奉謁
天叟公墓　南陽

古墓蕭然碧海涯　一思往事只長嗟
青苔満路無人弔　樹上啞々三両鴉」（10・ウ）

遊観音寺　滄洲

勝遊千歳寺　眺望入新晴
臨海吟情広　満山禅誦清
漁歌伝遠近　賈舶繫縦横
四面無塵事　悠然脱世栄」（12・ウ）

同　南陽

港上高憑梵帝家　山河景色十倍加
風前万里漁舟去　白雪浪如花落白沙

妙国寺にて、

卯の花や晴て舟去舟来り　洲」（13・オ）

日智屋の城趾を尋けるに、あの山こそと農夫の指しけれハ、

古城を望ば新樹はかり哉　洲

日智屋にて、

卯の花や名を貪らす賤の庭　陽

本東寺にて、」（13・ウ）

齢を保ちぬる人になんありける。去年」(4・オ)
□(難読、湯カ)の宮の座論梅、蚊口の琴ひきの松見に
行ける時尋けれハ、寿の字を書恵まれけ
るゆへ、予も拙き句をもて寿きける所縁
あれハ、こたひも訪ひけるに、猶健かなり。
百二度の麦秋語る翁かな　洲」(4・ウ)
けふハ空も晴やかにて、麦秋のけしき賑
ハしけれハ、
麦秋を諷ひ列たる日和哉　洲

途中喜晴　滄洲

山川雨初霽　朝日発清輝
百里騒遊客　行々曬野衣

高鍋の市店に立寄、餉喰んとて豆ふの汁
を」(5・オ)買て、
嫁かうる汁の直段も高鍋に煮たる豆腐のあち
きない旅　洲

従高鍋到津野途中作　南陽

涼風吹野服　景物好吟行
山色晴猶暗　濤声絶又生
傍松消半日　掬水洗余酲
自有清閑趣　悠然慰旅情
」(5・ウ)

垂水の茶店に休けるに、老たる夫婦の客
をもてなす咄を聞ハ、はしめハ田野の井
倉にも十年はかり住けるよし也。
風呂の茶の咄しみけり老二人　洲
飲食のからき世帯をのかれんと醴をうる老の
甘口　陽」(6・オ)

津野途中作　滄洲

荒途三十里　松樹欝縦横
四顧(観カ)行人絶　無由問去程

津野に到る頃ハ、日も早けれと道の労れ
甚しけれハ、旅の舎り求めて窓に倚りか
ゝり、道々の口号なと書つけゝる。」(6・ウ)
短夜や旅の労れの退兼る　洲
同し舎にて子規を聞て、
不如帰とハ誰に聞すそ子規　陽
朝またき、旅の舎を立出、一の宮に詣て
ける。華表に「日向国一宮」と書たる額
あり。抑此宮ハ、日向四社の一にして、
『延喜式』神名帳にも見へたり。」(7・オ)
柏掌の音も澄けり夏木立　洲
水深き岸の卯の花押わけて袖ハひつとも折て
手向けん　陽
心見の茶肆に休らひけるに、前に谷川の
音清く、隠士の耳をも洗ふへき流の上に
ハ、赤松の林打茂りて、仙人の棲とも見
えぬ。あるしの」(7・ウ)女ハミそしはか
りにて、詞の〔はし〳〵〕茶の汲さまて、
いつれむかしハうき川たけの身とそ見え
ける。
心見に寄は咲けりかほよ花　洲
美々津の荒川環を訪ひけるに、此頃の作
とて詩二首を示さる。いまた佳境」(8・オ)
にハ入され共、風雅の志やさしくそ覚へ
ける。扨しもきのふより伴ひし重兵衛、
美々川の北よりハ高千穂の道にかゝれハ、
別の酒酌んといゝけるまゝ、小亭に少し
の酒を買て、
二三合買たる酒を笑ふなよ」(8・ウ)これ一しや
うの別ならねハ　洲

美々津別人　南陽

悠々美々津　別酒更相親
可嘆同行客　忽為各地人

若草や居つてもよし寐てもよし　洲
糸遊やされハ野山の喜見城　律
　簗瀬川の辺に休らひ」（11・ウ）餉喰けるうち、
凍解や日に〳〵太き川の音　洲
　梁瀬を過て野中に休む。
きれ凧のあらハ敷へし道の草　律
　春のけしきを愛て、永き日を遊ひ暮し、夜に」（12・オ）入て帰る。
朧〳〵夢心地なる宵の空　律
　郷に帰りて、朋友に示す。
かいて見よ梅見戻の旅衣　洲
」（12・ウ）

文化十有四年正月　　滄洲録之　」（裏見返し）

七　卯の花

卯の花　」（表紙）

ことし文化十あまり五つと云ふ年卯月中の一日、延陵までの佳境、騒人を尋んと、二男南陽を携出るに、雨のそほ降けれハ、晴ての後の遊ひこそいと興あるへけれと、人々とかめける袖をふりはなして、」（1・オ）
適の旅衣なり古あわせ　滄洲
卯の花をふり顧る首途かな　南陽
　加納村を過けるに、賤の家の垣根、道の側、所〳〵卯の花の咲るを見て、
卯の花や辻道の記の書始め　洲
　経加納村　南陽
東郊百里伴烟霞　吟畔相迎」（1・ウ）八九家
墻樹青々花尽落　一村渾唱采茶歌
　渡赤江　滄洲
漫々赤水望佳哉　無限扁舟去又来
北岸喬松南岸柳　緑陰深処有章台
　同　南陽
煙雨濛々赤水頭　一時回首」（2・オ）倚扁舟
絃歌相和南兼北　不是青楼是酒楼
　島の内の茶店に休けるに、あるしの老母うらなくもてなし、茶汲ける。
茶屋一つ圍ふ老木の若葉哉　洲
　広原の田の面に、鷺の群居るを見て、」（2・ウ）
卯の花といゑバ立けり小田の鷺　洲
　途中値雨　滄洲
渺々荒原路　不愁雨沛然
青田増潤色　預此ト豊年
　佐土原に宿りける寐覚に、郭公を聞て、
能宿を借あわせけり蜀魂　洲
　同し舎りにて、
蚊帳一つ借て静けし旅の夢　陽
」（3・オ）
　客暁喜晴　南陽
夢覚簷端雀語親　朝暉出樹映城闉
可憐窓外山河色　総対天涯探勝人
　新田川の舟に乗けるに、きのふより跡よ先よと行ける黒北村の重兵衛」（3・ウ）追付て、同し舟に乗る。是よりハひたと伴ひける。淳朴の人柄なれハ道の咄も睦く、程なく新田村に到る。此所の卯兵衛といゑる人ハ、ことし百とせあまり二とせの

むかしより名に高浜の梅か香を」（5・ウ）袖に
つゝみて帰る家土産　〃　〃
月知梅見てから外に梅ハなし　〃　〃
詩にも梅酒にも梅の誉れかな　〃　〃
暮るゝをは月のミ知るや梅の庭　〃　〃
見る度にあかぬ色なる此んめの深き匂ひをい
つかわすれん　律」（6・オ）
立よりて愛るもあかぬ花ころも手折ぬ袖にう
つる梅か香　律
名の梅や香をたとり行風の筋　〃　〃
春ありて此梅か香を命かな　〃　〃
梅花の下に吸箇の酒を酌て、
梅見酒つれ〳〵草の男かな　洲」（6・ウ）
誰そ来よ梅見の酒を下戸二人　律
梅見の興ハかきりなけれと、かきりある
日の暮かゝり、雨もそほふりけるにそ、
今宵ハ此所の源蔵と云へる紙漉の家に舎
る。」（7・オ）
つい一夜宿かりにけり庭の梅　洲
梅見から宿かる庭の柳哉　律

同し家にて春雨を題す。
枕一つ借けり旅の春の雨　洲
宿あらは降もしほ也春の雨　律
同し家の嫁と隣女の三弦」（7・ウ）弾を聞
て、旅の心も晴やかなれハ、序に雨も晴
なん事を祈りて、
千早ふる紙漉との、御利生に心も空もはる、
三せん　洲
雨晴の吟
はれて又雨をふらせつ柳影　律」（8・オ）
高浜より高岡へ行ける道すから、遠山の
梅を見る折しも、余寒頻なれハ、
余寒とハ是を云ふへし雪の梅　律
ある人の庭に、梅の咲しを見て、
いつも此里に住たし梅の庭　律」（8・ウ）
亭午の時、高岡省身堂のぬし安藤君を訪
ふ。
陶潜の門を叩くや糸柳　洲
梅か香に奥床しさよ高屋敷　律
相見の礼も終らさるに」（9・オ）この地の
諸好士湊ひ来り玉ひ、詩会夜々四更を過
ぬ。詩ハ記するに暇あらす、詩題の誹句
をあら〳〵録しぬ。
春雨　安藤君宅にて
君か代を寐て暮しけり春の雨　洲」（9・ウ）
文芸の遊もしむや春の雨　律
うくいす　大迫君宅にて
鶯や乗殿れたる渉し舟　洲
鶯に国の訛ハなかりけり　律
春日行　徳丸君宅にて
柳から柳にありく河辺哉　洲」（10・オ）
折〳〵ハ扇かさして春日かな　律
此外数題あれと略す。
安藤君の宅にて、二八はかりの婦人二人
して三線弾けるに、又七歳の女子八千代
〔し、〕といへる曲を操りけるを、」（10・ウ）
梁塵も飛鶯の初音哉　洲
ある人の酒餼を恵ミ玉ふを謝す。
戴た手にあまる梅の匂ひ哉　洲
諸君の別を送り玉ふに、名残おしみて」（11・オ）
かゑりミる人を隔つる霞哉　洲
帰るさ、倉岡の峠にやすミて、

水無月の遊にハ暑もたえかたかりしに、けふハ秋風のいと涼しさに、覚すしらす江平をも打過、程なく赤水の渡りに舟を浮め、

渋鮎の咄やかまし赤江川

中村町に到り、酒家に入て」（9・オ）纔に残りし銭のありたけ新酒を求て、酔に乗し初更の頃家に帰る。帰りて忘れん事を恐れ、拙き筆の運ひも厭す、書しるし侍ると云爾。

文化十三丙子九月記　　滄洲　」（9・ウ）

六　梅か香

梅か香　」（表紙）

高浜香積寺の梅ハ、実に数百年の物にして、名たゝる古木なり。往昔、国の守爰に遊ひ玉ふや、梅を見て則詩あり、詩中「当初唯有月」（1・オ）明知」の句あれハ、「月知梅」と号ぬと云ふ。予や其梅を見る事度々なれと、いまたその花を見されハ、真盛の色香を賞せんと周く」（1・ウ）爰に咨詢り、睦月十日の朝またき旅装ひそこ〳〵にして雨律子を伴ひ、高浜さして歩を拾ひけるに、春のけしきもやゝ調ふて、野路の」（2・オ）人め盛りなれハ、

梅か香を押わけて行野道哉　　滄洲

長閑さや霞の中の二人列　　〃

行道やさのミいそかぬ野路の梅　　雨律

はつ春の寒さに涼松の名ハ似気なけれと、四方の」（2・ウ）詠めの面白きに愛て、暫く休らひける。

吸箇に匂ふ梅ありす、み松　　洲

休らふて春も遊ふや涼松　　律

細江の里に鶯を聞て、

鶯のはつ音漲る細江かな　　洲」（3・オ）

鶯を風かもて来る初音哉　　律

同し里の賤家に茶を乞んと立寄けるに、年ふりし松と梅、庭前を粧ひけれハ、

松青くいよ〳〵梅の白さ哉　　洲」（3・ウ）

揃ふたる梅松竹や千代の庭　　律

処々の吟

踏迷ふ道もうれしや芹嫁菜　　洲

楽ミハいくらもあるよ春の旅　　律

春風や白玉姫も出そこない　　〃

きしの声あちらを見れハ野焼哉　　〃」（4・オ）

悟性寺にて、

什物の第一ならん寺の梅　　洲

面白し枝も五重の塔の梅　　律

古ひるを手柄に梅の木ふり哉　　〃

かゝる拙き口号に時も移りけれハ、いさや打立んとて」（4・ウ）杖を曳けるに、やう〳〵申の頃香積寺に到る。

題月知梅　　洲

梅樹参美古道場　百年遺愛比甘棠

清姿不染紅塵色」（5・オ）高萼堪袴白玉光

夜月娟々敷淡影　春風裊々放芳香

邦君昔日題詩後　更使佳名満四方

朝またき逆旅をたちて」（4・ウ）八幡の里
を行けるに、五十余の賤の女、鴉毛の馬
に打跨りたるに、四五丁はかり伴ふて、
馬に乗女を嬲るすゝき哉
又たわむれに、
若ひ時人に乗られし替りにや股をつき毛の馬
に乗らん
小僧谷の瀑泉を見るに、四五丈はかりも
漲り落る水のあたりに、草々の錦いと」（5・オ）
美しけれハ、
草々のにしき縫けり瀧の糸
養壽院とて小庵のあるを、人の教に立寄
見れハ、庭前の眺望かきりなし。
此わさや秋の錦の呉服店（三字虫損）
都於郡の古跡ハ度々遊ける上、老の労も
甚しけれハ、この度ハ尋ね侍らす。たゝ
洗心の滝を見んと彼あたりに」（5・ウ）〔行
けるに〕、一翁杖を携て来る。名を問ける
に、西股内蔵右衛門と答らる。かねて西
股氏の近きあたりと聞居けれハ、滝の事
尋けるに、ねもころに教へ玉ひぬ。
露添て糸筋太し滝の水
佐土原ハ水無月に遊ひぬれハ、此度ハ佳
境を探らす」（6・オ）酒店に一時の労を休
めて過ぬ。
途中作
寛行探勝客　経市又経村
寺大都於郡　城高佐土原
傍河秋樹静　横野晩煙昏
砧杵誰家婦　声々断旅魂
佐土原より平松に到る道の側に四五人集
りけるを、何事やらんと近より見れハ、
焼酌を一升」（6・ウ）枡にて飲合ける。こ
や樊噲か鴻門の勢ひもかくやらんとあき
れて打過、暮かゝるころ平松に着。今宵
ハ連光寺に宿りぬ。夜もすから波濤の響
に眠を覚す。のミならす、搗衣の声遠近
に聞えけれハ、
旅の身の薄衣にひゝく砧哉
更る夜を淋しからする砧かな　」（7・オ）
宿連光寺
遠尋秋日景　一夜宿僧房
松樹伝幽韻　菊花送瑞香
不唯紅燭色　兼放白毫光
喫茗南窓下　悠然洗俗腸
夙に連光寺を去て、久峰の麓を過。廣瀬
の里を経て、石崎の渡りを渡りぬ。爰に
ハ予か訪へき所あれハ、家〳〵に問、人
々に尋けれとも」（7・ウ）それと云ふへき
よすかもなけれハ、本意なくも打過、浜
松の間を行けるに、大道直して髪の如き
も、茶を乞へき家もなけれは、渇を凌て
島の内に到り、ある家に立寄、茶を乞ひ
けれハ、あるし農事の閑しきも厭ハす、
ねもころにもてなしける。　」（8・オ）
黄に白に客もてなすや菊の花
と綴りぬれと、あるしハ農父の淳朴のミ
なれは、獨打吟して暇を告、島の内の府
本を見廻り、それより青水村に到る。爰
にハ豊の秋を祝ふて躍のあるよしなれと、
•其まゝ打過て、花か嶋を経、舟塚山の茶
店にて」（8・ウ）一盃を傾て、
酔た顔競へて見たる紅葉哉

五　豊の秋

豊の秋　」（表紙）

杜預に左伝の癖あり、予に烟霞の癖ありて、佐土原に遊しハ水無月のはしめなりしに、今復月見月の半かのあたりに遊ぬるハあやしむ人もあるへけれと、慈鎮和尚の「人毎にひとつの癖ハあるものそわれにハゆるせ敷島の道」と」（1・オ）よまれしを頼の杖に、再遊の吟を書あつめぬ。これを何とか号んとおもふに、か、る遊の楽ミも豊き秋の賜なれはや、其ま、「豊の秋」と標題しける。

文化十三閏八月　滄洲自序」（1・ウ）

秋の日のつれ〳〵にひかれて智門子を訪ひ、詩談時を移しける序、智門子云けるは、「水無月の遊今に忘れかたけれは、復この秋の薄に招かれ、萩を枝折、菊を愛、あるハ田の面〔の雁〕をなかめ、あるハ駅路の〔鈴〕虫を聞んとおもひ立ぬ。子行てんや」といどミけるに、其ま、日を約して」（2・オ）帰りぬ。

後の葉月中の九日、空も晴やかなるに旅装ひして、加納村に到る。四方の田刈もとよの秋を競ひ、賑〳〵しけれは、我宿を立出て見れハ田刈かな

大塚の岩坂に、薄の穂に出、萩の花の咲つ、き中に休て、餉喰ひける。豊さや食前方丈萩す、き　」（2・ウ）

と戯けるに、田の面に鷺の群立しを見て、群鷺の立跡白し蕎麦の花

途中作　智門

晴色携節此遠行　々々探勝恣幽情
山頭照樹丹楓美　村外栖烟白鷺明
馳馬農人欣稲熟　憩途旅客愛虫鳴
往来三日詩三百　数発秋風金玉声　」（3・オ）

柏田の茅店に酒酌けるに、少しはかりに顔の紅葉しけれは、下戸の重宝さよと自賛して、

十文てたる事を知る新酒哉

醒易き新酒の酔のさめぬ間にと、足をはやめ、岩地野に到れハ　道の側なるあはら屋に柿のありけれハ、「渋〔ひ〕かハしらねと柿の初ちきり」と」（3・ウ）古句を吟して喰けるに、果して〔皆〕渋けれハ、「喰柿も又喰柿も皆渋し」と又古句を吟して立去。　われも又、

渋柿を喰ふ〔の〕も旅の咄かな

途中晩景

一条荒径抱村斜　秋色纔連八九家
遠近蕭然行客絶　夕陽唯伴数群鴉

塚原の辺を行けるに、向ふを」（4・オ）見れハ、秋の野になまめき立る女郎花にハ

あらて、たわれ女のなまめき来るを見て、あすハ誰に折るそ道の女郎花

と云て打過、申の頃本荘に到り、こ、かしこ見廻りて、逆旅に投しける。夜もすから蟋蟀を聞て、

淋しさを啼尽しけり蟋蟀

山路を攀て、午鶏の啼ころ久峯に到る。

久峯や目下にならふ雲の峯

登久峯

巍然大悲閣　千里海風清

長嘯青松下　自疑鸞鳳鳴」（12・オ）

仝

千年古寺接蒼空　夏日登臨気自雄

海上涼風山上景　總収騒客錦嚢中

仝　智門

雨晴雲散樹葱々　風拂」（12・ウ）衣襟興不窮

清武朝辞孤郭北　久峯晩到古城東

門前小市開天外　海上軽舟泛鏡中

乗酔徘徊老松下　炎威去尽梵王宮

仝　智門」（13・オ）

萬仞久峯連碧天　回臨江海与山川

悠然景色情無尽　詩酒堪誇李謫仙

仝　智門

久峯千畳翠　香閣白雲辺

下界風光好　詩情玄」（13・ウ）又玄

涼風に名残ハ尽ねと、前途程遠けれハ山を下り、峯の薬師より下那珂に到りぬ。

爰なん悪翁の世を逃れ玉ふ里なれハ、里人に問て其幽栖を訪ひけるに、竹門戸さゝす苔徑（ヒ）」（14・オ）掃ハす、座上に数巻の書を攤けたる中に、膝を抱ひて居玉ひけれハ、其侭這入り初見の礼もそこ〳〵にして、詩哥の談に時を移しぬ。

涼風にたる事をしる隠居かな」（14・ウ）

訪悪翁隠居

遠尋高士宅　地僻対青岑

屋後千林茂　門前一徑深

新詩欺白雪　佳茗泛黄金

向晩南窓下　薫風颯滌襟

仝　智門

隠士高名旧不虚　多年」（15・オ）避俗友琴書

涼風吹満南窓下　緑竹声清興有余

幽興猶極りなきも斜日已に限あれハ暇を告て、住吉へ詣んとて岩瀬川に到る。此頃まで降つゝきし雨に水濁りて」（15・ウ）深き浅きも分らされハ、草刈童に浅瀬をならひぬ。

岩瀬即事

躊躇岩瀬上　濁水泛青蘋

深淺偏難辨　呼童此問津

是より田夫を枝折にして」（16・オ）右にあゆミ左に廻り、住吉の浜に到る。

涼風や檍か原の浪間より

日已に斜にしていたく飢ける〻、道の側なるあはら屋に酒を求けるに、あるし酒を沽、肴を沽て供しけるに飢腸を」（16・ウ）潤し松林の中を歩ミけるか、暑さに労れも云ふはかりなし。

謾成

長路炎蒸甚　一身竹杖扶

欲投茶店息　幾回問征夫

江田村に到れハ、はや日も暮て」（17・オ）遠寺の鐘蕭々たり。道の行衛もわからされハ、艸の褥に休らひ居けるに、商人の通るに逢ぬ。行先の道を問けるに委しく教へけるを力に、又そろ〳〵と足を運ける。」（17・ウ）

謾成

蓮池　智門

堤上風涼夏日天　孤松傍屋碧池辺
幾人憩息茶亭裏　一興啣盃対玉蓮」（5・ウ）

途中謾成

郊天昨夜雨初収　騒客相携遠勝遊
暑気蒸々村野路　幾回留杖漱清流

島のうちの小店に焼酎呑けるに、あるしの老女ねもころに」（6・オ）すゝめける序に貧しき世渡りの佗しさなと語りけれハ、世渡りの望姓を何と焼酎のからき命をつなく老の身

と狂哥しけるうち往来の人多く立休らいける。やゝありて南より涼風に縞の衣裳を」（6・ウ）飄し来る女を見て、あれこそきぬ江よ、何方へ行やらんと人々の云ふまもなく同し茶やに休ミて語るを聞ハ、赤水の流の女になん侍る。

游君の衣裳ハはてなしまのうちそとの見掛ハうき勤かは」（7・オ）

羅につゝみ兼たる暑さ哉

廣原ハ鬼橋悪翁といへる佐土原の隠士の居玉ふよし、村婦野童に其栖を問と知るものなし。ある人の教に、村長に問バしれもやせんといゝけるまゝ、其家を尋行て」（7・ウ）問けるに、それこそ此所にてハなく、是より東下那珂といへる里なるよし教へけれハ、禮云捨て立去、其あたりを見廻りけるに、福寿寺といへる一小寺あり。立より見れハ老僧獨茶を煮たり」（8・オ）。

訪村寺

涼風颯々葛巾斜　緩歩吟詩対晩霞
古寺蕭條村樹裏　老僧抱膝獨烹茶

廣原口號　智門

見説廣原百畝田　乾坤」（8・ウ）望尽酒家前
稲苗裊々如図画　二客留笻得数篇

謾成

脩（修）途行客倦　対水憩長堤
閑歩誰家叟（ヒ）　過吾歌鳳兮」（9・オ）

一里松の酒店に盃を弄して、

風薫る眺も遠し一里松

偶成

乾坤風日霽　佳景伴吾行
渉水全忘暑　看山数□（虫・問カ）名
古村蒼樹静　荒野」（9・ウ）翠煙横
僧院知何処　鐘聲送晩聲

行々て佐土原に到れハ、日もすてに暮ぬ。此地の医師黒木玄泰翁ハ、曽て酒杯を酌合し人なれハ訪ひけるに、庭上に一株の奇松を栽」（10・オ）松下に一池の水を湛へて金魚游泳す。松下の童子に主翁を問へは、何方へやら薬を採去れしと云けるゆへ、一碗の茶に咽を潤し、賈島か隠者を訪にあわさる詩を吟し、直に逆旅に投しける。あるじ」（10・ウ）蚊遣焼けるを見て、

宿賃の外て饗饗す蚊遣哉

朝またき旅館を立て、城下のそこ〳〵見廻りて大光寺に到る。

遊大光寺

城外曳笻高又低　尋奇」（11・オ）追勝訪禅栖
対風吟嘯松門下　不見紅塵見緑畦

是より久峯の佳景を尋んとするに道の左右も覚束なけれハ、或ハ牧童の指に随ひ或ハ農夫の口に任せ、」（11・ウ）野径を渉り

吉村貫之　播磨州赤穂人。
吉田玄朔　京師医。
山玄勇　周防州医。
秦惟孝　字悌卿、称周齊、周防州山口人、業医。」（51・ウ）

文化三年丙寅秋

滄洲　安井完子全述
（子全氏）（安井完印）」（52・オ）

四　二日酔

二日酔」（表紙）

序

此遊や暫遊にして史遷の跡を践にもあらす、蕉翁の遺を拾ふにもあらねハ、奇を尋ね幽を探るも纔に二日路の酔まきれにつゝりし口すさミ」（1・オ）なれハ、二日酔と号ぬ。かゝる拙き言の葉を書記し置も紙の費と云ふへけれと、後にハ覆甕の助ともならんと管城子に命する事しかり。

滄洲」（1・ウ）

予か佐土原に遊んと思ひ立しハ、卯の花咲郭公啼初る頃なりしかとも、或ハ紛々たる塵事に纏れ、或ハ綿々たる霖雨に阻られ、本意なくも果さゝりしに、水無月の初四はしめて清閑の人となり、たま〳〵新晴の時に」（2・オ）逢ひ、あしたの涼風に吹立られ釈の智門子と行を発す。

涼風に吹送らるゝ首途哉

渡両国橋　智門

両国連流両国橋　遠横南北野雲飄
薫風渡水衣襟冷　樹色陰々暑気」（2・ウ）消

程なく赤水の辺に到り、渡りの舟を待。

涼しさや呼とも起ぬ渡し舟（守ヒ）

渡赤江

北岸将南岸　翠楼臨水雄
買舟来往客　總在管」（3・オ）絃中

全　智門

平沙千尺望悠々　市井中分赤水流
南北遙傳琴笛響　回首遊客在青楼

上の町江平をも過て、盤余」（3・ウ）彦尊の宮居し玉ふ舟塚山の辺に到る。午時の暑さ甚しけれハ、松下の茶店に暫休て、

涼しさや舟つか山の松の色

花か島の名ハ花やかなれとも、草生しけりたる街に茅店纔につらなりたる中に酒賣」（4・オ）家のありけれハ、足弱の足休んと立寄けるに、夕顔の咲しを見て、

夕顔の花に新し藁庇

酒店偶成

両人携手歩涼風　緑水青山望不窮
小憩傳盃茅店裏　紅顔笑対白頭」（4・ウ）翁

花か島の酔に乗して蓮池の蓮見んと急きけれとも、紅衣いまた開す、たゝ翠蓋の浮ミしなれハ、池上の亭に腰打掛て、酔後の渇を潤さんと水乞けるに、十四五と」（5・オ）見へし女の髪結居けれハ、

昼顔をうつして笑ふ鏡哉

同前　　秦惟孝

才子翩々游学年　皇*京風物費金銭（原本、*印で一字分開ける）
長卿此作凌雲賦　伯牙或弾流水絃
自古龍門非易問　于今湖海有誰憐
送君忽起郷関思　遙向滄波萬里旋

同前　　釈全敬

憐君此去欲西帰　祖席離憂涙湿衣
遙望関山千萬里　奇雲一片作峯微」（47・オ）

同前　　小阪長此

梅雨昼昏鳧水頭　与君臨別此登楼
旧郷騒友如相問　客舎多閑懐昔遊

二

三春相遇　帝京中　君去杯樽誰共同
遙想煙波千萬里　帰帆明日在長空

三

客舎蕭条此送君　霏々梅雨夕陽曛
縦令故国滄溟遠　須使雅音時得聞」（47・ウ）

留別諸君

一為孤客已三春　此日分襟洛水浜
何愧帰郷不衣錦　諸君綵筆耐誇人

下澱河

澱水舟行疾　連山自似奔
回頭看伏兒　十里隔雲昏

大阪留別友人

遠游興尽賦帰田　大阪城辺将発船
多少親朋倶送別　詩如錦繡酒如泉

季夏三日帰家

三年帰国一書生　親戚侯門僮僕迎
昔時傷別悲哀語　今日変為歓笑声」（48・オ）（48・ウ）

跋

我これを善とすれとも人是を嘲る或り。其嘲るところかならす非とせす。聖人にあらすんハ、誰か其嘲を免んや。今、安井子東行の紀を輯て是か跋を乞ふ。此篇を閲するに、楊子（ママ）雲大玄を艸す、ある人これを見て、玄尚白とあさける、此書や大玄にハはるかに」（49・オ）おとれハ、其嘲にハ関からて終に尚白集と号けしと自序に明らけし。予近年病に嬰て禹歩なれとも、忽武蔵野の月を詠め宮古の花に遊ふ。眼往て月花に属か月花来て眼に入か興するにたへたり。是所謂不朽の文にあらすや。想に或ハ尚白とハ、涅不緇の白ならんかも。良に」（49・ウ）安井子ハ予か猶子にして、幼より吾に属て、書をよむ。今度東武京師の魁元に学んて、振衣千仞岡濯足萬里流の世表日頃に倍せり。氷ハ水より出て水より寒きとハ、それこの謂なりけらし。

文化三丁卯（ヒヒ）秋（内寅（未））　錦江園主人　吟水誌」（50・オ）

（余白）」（50・ウ）

姓名録

岡敏　字公訥、称野口左門、阿波州人、業医。
伊東信卿　名祐之、称文龍、肥前州嶋原医師。
長尾龍　字雲卿、号赤城、称井田定七郎、東都儒家。
釈知雄　肥後州熊本光栄寺住僧。
釈施曜　摂津州佛照寺住僧。
小林宗　称石井金次郎、京師人。
釈貫道　越前州僧。
釈雲雁　近江州僧。」（51・オ）

湖上岧嶤古梵台　石奇山秀絶塵埃
騒人吟望金欄下　把筆偏慙紫女才

同小坂子泛湖

夏日風波穏　飄々泛小舟
湖欺雲夢沢　城壓岳陽楼
画裏雙橋跨　鏡中孤島浮
蘋汀晴色漾　煙浦翠光流
仰面看青嶂　忘機伴白鷗
野翁垂釣立　漁父扣舷謳
宜咏蘇公賦　欲同范蠡遊
人当疑李郭　坐是対応劉
酌酒俱醒酔　題詩互唱酬
偏貪奇絶景　自笑数回頭

」(44・オ)

仝

湖水開明鏡　湖山列画屏
湖南又湖北　佳景總難形

遊湖上酒楼

高楼酌酒倚欄干　湖水洋々眺望寛
滋賀唐崎比良岳　依然總作画図看

唐崎孤松

偏愛唐崎一古松　枝低葉密緑重々
蟠根連渚龍鱗老　偃蓋臨湖鶴影濃
多歳自懐君子徳　明時未得大夫封
盛名高接天庭上　海内長為萬木宗

」(43・ウ)

滋賀覧古

訪古閑遊滋賀都　漣漪打岸洗荒蕪
只今唯有山桜在　歳々花開五六株

銀閣寺にて、

常盤木の落葉こそつく夕へ哉

葵祭にて、

御車も粧ふ葵祭り哉

奉送安井先生帰郷　釈知雄

弥天四海相逢初　目撃猷存意不疎
赤水鯉魚若無恙　帰来為寄一行書

」(44・ウ)

此春の花にきなれし旅衣たち別れぬる事そおしけれ

同前　釈施曜

驪駒留不駐　仗剣出仗皇州
黯淡離心切　龍鐘別涙流
関河千萬里　来往一孤舟
世路知音少　明珠莫暗投

」(45・オ)

同前　小林宗

海西詞客此徘徊　洛下相逢共挙杯
強学雅窮劉向藉　壮遊兼尽子長才
山河望隔三千里　魏闕心帰十二回
萍梗不知何処会　醉中分手轉悲哀

同前　釈貫道

錦衣装就映華筵　画舸明朝下淀川
詞客筆端飛白雪　故人琴上鼓朱絃
風塵聚散能難定　日月離違各自憐
開士向来無貨物　為将詩賦送君旋

同前　吉村貫之

淀水津楼日出時　帰帆一片向天涯
更憐共酌三盃酒　不耐今朝此別離
別路や若葉に曇る朝けしき

」(45・ウ)

同前　釈雲雁

南風分袂　帝城西　惜別将能逐馬蹄
今日更逢梅雨下　閑窓蕭瑟晩雲齊

同前　山玄勇

遠遊相共在　皇畿　何事今朝已送帰
一囀老鶯求友纔　千条碧柳止人稀
路傍風起蘇生節　梁上涙沾李氏衣
莫向津頭雷雨渡　腰間三尺二龍」

」(46・オ)

(46・ウ)　飛

多武の峯に登る。

一坂ハ藤を力に上りけり

吉野川を渡り、妹背山を見、よしの、山に到る頃ハ彌生の晦日なれハ、千本のさくらもちりうせて、雲と見し花も今ハ雲を花と見るそ本意なき。

来年を約して戻るさくらかな

三月晦日遊吉野山

乾坤春色迫　夏気満山中
已絶看花客　相逢采葛翁
溪橋通酒肆　石径到禅宮
登屐探幽罷　盤桓憶謝公

仝

石径登来苔色新　南朝旧物委灰塵
古宮深鎖煙霞暮　荒墨空生艸樹春
啼鳥嚶々如慕主　残花寂々易愁人
留節独立香台下　偏憶楠公勲業頻

遊竹林院

遨遊小蘭若　遶屋竹林繁
偏愛山中静　何知世上喧
煙霞粧宝樹　泉石潤芳園

40・ウ

41・オ

四美俱催興　慇懃慰客魂

是より高野へ趣んとて石磴を下りけるに、道の側に石碑あり。いかなる人のしるしならんと立寄見れハ、村上義光の墓にて、碑文ハ高取の臣内藤景文か筆なり。

いつまても朽せぬ名也岩つゝし

高野山に登る。

一坂に一休ミなり夏木たち

高野山にて、

寺〳〵の数廻りけり杜若

壺井の宮にて、

名もしらぬ木々の若葉や神の森

誉田の宮にて、

繁る木の中に小高き鳥居哉

道明寺の天神に詣て、

笋の煮賣かほるや神の庭

藤井寺にて、

新しき茶屋一つあり若楓

広沢の池ハ月の名所なれと昼の遊ひハ詮なし。

昼ハ月の留主を守るや鷸鳥一羽

41・ウ

42・オ

卯月の十日あまり二日、湖水の佳景を探らんと坂玄俊を携へ逢坂山の麓を過。関の清水を汲て、

しける木の圍へる関の清水哉

蟬丸の祠を拝して、

是や此祠にきくや蟬の声

遊園城寺

古寺高楼似岳陽　大湖連麓望茫々
欄前揮筆風騒客　八詠詩成圧盛唐

仝

琵琶湖畔梵王城　水色山光入戸清
弔古徘徊三井上　晩鐘蕭寂客心驚

粟飯か原を経る。

芋植る翁淋しゝ古戦場

義仲寺（朱）に到り、よし仲の墓を拝して、

碑の銘も咲埋けり苔の花

はせを翁の墓を拝して、

旅の身や新茶一ふく手向ゑす

石山の麓なる茶店の楼に宿して蛍を見る。

葛城の夜るの契のほたる哉

遊石山寺

42・ウ

43・オ

吉宮に詣てける。折しも汐干の賑ひに酒を酌て、

か、へ帯解たるま、の汐干哉

遊墨江

晴光遙泛墨江浜　神廟清然霞彩新
岸上長松経幾歳　更看翠色映青春」(37・オ)

難波屋の松、妙国寺の蘇鉄なと見、堺の浦に到り、

摂河泉に跨る春のけしき哉

壬生寺へ狂言見に行て、

きやう言の手に終さわる柳哉

自京師到南都途中作

朝日発都門　春風歩溥原
千山山色麗　萬水水光温
時訪花辺寺　或過柳」(37・ウ)　外村
行々数沽酒　不厭向黄昏

木津川ハいつミ川なり。

春水や湧て流る、和泉川

宿寧楽

古帝城辺夜色催　微風蕭寂入窓来
仰看三蓋山頭月　偏照天涯客子杯

南都覧古

南都事去幾春遷　旅客吟遊憶往年
鳳闕龍池雖已矣　三条九陌自依然
閑園雨寂残花落　古寺人稀弱柳連
日暮留笻茶店下　呦々麋鹿満庭前」(38・オ)

嫩艸山

初遊不識名　唯見春光好
相値問行人　慇懃指嫩艸

春日の祠に詣て、

広前の柳や時の青幣

手向山の八幡ハ菅公の幣も取あへすとよミ玉ひし所也。庭前に菅公腰かけの石あり。

こしかけの石を洗ふや春の雨」(38・ウ)

猿沢の池を見、采女の身を投し事をおもひ、

思ひ切て飛込池の蛙かな

采女の祠ハ池の西にあり。東の堤上に衣掛柳あり。

衣かけし形にしたる、柳哉

登元興寺浮図

登臨五層塔　呼吸接蒼空
四顧三千里　宛然在掌中
東大寺・興福寺・ミとりの池」(39・オ)轟の橋・雲井坂なと見廻りて、是より西を見んとまつ法華寺に行ぬ。爰なん古へ　禁庭の跡なるよし。

踏ハ恐れ禁裡の跡の檗艸花

西大寺・招提寺より菅原の天神へ詣ぬ。

御幣に咲交る柳さくら哉

法隆寺にて、

春色も浮世の外や法隆寺」(39・ウ)

龍田の祠より龍田川に到りて、

春ハ又花のにしきやたつ田川

三室山の麓を通り、達広寺・片岡山・染井を見、当広寺に到り、

織殿に糸操掛る柳かな

久米寺・安倍文珠・桜井の駅を経て、佐野の渡りに到る。

雪と見て袖を拂ふや梨の花

泊瀬にて、

花と花のあいを流るや桜川」(40・オ)

塔よりハ遙に下の雲雀哉

南禅寺にて、

豆ふ切音静なり春の雨

春日郊行

東郊晴日暖　携友歩春風
擁寺千山秀　穿村一水通
農耕翠楊下　牛臥緑蕪中
行止随花鳥　自歓詩亦工

けふハ桃山の桃見んとて伏水に到ぬ。去年東武よりの帰るさ、此地に遊ひしハさ月の末にて、其葉の萋々たる」(34・オ)をのミ見て本意なく思ひしに、時なる哉、今年灼々たる其花を(衍)見る嬉しさに、宇治見の亭に酒を酌て、

酌取ハ仙女の如し桃の下

伏水見桃

晴日遨遊伏水浜　桃花灼々媚陽春
把盃幽賞山亭裏　自怪武陵源上人

仝

伏水尋桃独杖藜　千株萬樹自成蹊
已知不減玄都観　謾学劉郎酔裏題」(34・ウ)

墨染寺に遊ひて、

花白し墨染寺の前後

和秦悌卿見寄韻

蕭然客舎覚春深　咏柳吟花惜寸陰
偏恨知音天下少　思君空撫伯牙琴

いさや嵐山の花を見んとて、嵯峨をさしてすゝミける道すから、まつ梅の宮に詣て、

此ころハ桜も咲や梅の宮」(35・オ)

桂川を渡り、林の中に西行桜の咲しを見て、

西行ハ何とよミしそ此さくら

嵐山看花

嵐峰春満百花芬　影映堰川生錦紋
風外霏々梁苑雪　樹頭裊々巫山雲
清香頻撲遊人酒　嬌色偏侵舞妓裙
亭上舟中尽成酔　賞情倶惜夕陽曛

遊嵯峨

春満嵯峨物色饒　尋幽探勝伴漁樵
晴光欲画栖霞観　佳気堪題度月橋
桂水煙生千柳暗　嵐山風起百花飄」(35・ウ)

興来茅店謾沽酒　酔裏陶然客恨消

法輪寺にて、

腰掛の石もすれけり花の寺

松の尾ハ酒を守り玉ふ神なり。広前の酒店に杯を把て、

花の影朧に酌や酒の燗

東山看花

東山日暖彩霞浮　萬樹花開映画楼
携妓携樽多少客　風流可擬謝公遊

春雨のつれ〳〵なるに箏を弾して、

箏の音も降交りけり春の雨」(36・オ)

帝里春色

天晴遠近弄春光　*帝里繁華不可当(原本、*印で一字分開ける)
紫陌雲迎公子駕　青楼風暖美人裳
煙霞五色輝城闕　桃李千株映柳楊
日夜萬家開宴処　絃歌盈耳自洋洋」(36・ウ)

遊御室仁和寺

曽聞碧海桑田変　今見離宮作梵宮
唯有庭前百花樹　濃紅不改笑春風

いてや墨の江に遊ひ、幾世経ぬらんとよミし岸の姫松一見せはやと出立、まつ住

溪橋度虹入石門　苔径踏雲到梵宮
庭前瀟洒無塵俗　況復秋色満山中
嶺頭松樹経霜緑　溪上楓林照水紅
楓林松樹交如錦　溪上嶺頭景無窮
此日遨遊開樽酒　此時談笑対遠公
興闌樹下惜斜日　愛深樹上恐暴風
暴風暴雨真可恐　明日亦来賞丹楓

槙尾にて、

秋深し囲ひし寺の籬哉

栂尾にて、

山寺や霜ふむ鹿の声はかり

暮秋郊行

東郊無伴影従形　一止一行酔又醒
日霽村々秋穫競　風寒処々暮砧聴
逢人数問河辺道　避馬暫休林下亭
幽興幽情猶未尽　回頭月色満蘋汀

処〳〵柚味噌の薫る夕へ哉

秋夜下溪河

天霽澱河月色明　扁舟一葉沿流軽
千尋波浪金風冷　両岸蒹葭玉露清

(30・ウ)

林外遙看漁火影　橋辺近響櫂歌声
行々已見東方白　安臥忽臻大坂城

題石川丈山詩仙堂

山畔茅堂経幾歳　青苔碧艸連荒砌
庭前蔽芾一株松　応是先生曽所憩

神泉苑にて、

雨乞し昔を訪や時雨空

応人請賀吉田玄朔翁七十初度

三世為医徳業全　今年称寿古稀年
乾坤長受無疆福　日月猶期不老仙
沆瀣杯伝堂上馥　斑爛服舞膝前鮮
児孫賓客頻成酔　酔裏共歌天保篇

(31・ウ)

(31・オ)

除夜

去歳遊東武　今年客　帝京
復逢九冬尽　偏歎二毛生
対燭思千里　吟詩到四更
乗閑時酌酒　春味満盃清

皇都早春

天地春回宿雨晴　氤氳瑞気満　皇京
東山初日蒸霞暖　北野新梅帯雪清
萬戸千門杯酒足　三条九陌管絃鳴

何愁遠作他郷客　四海融々楽太平

初寅の日鞍馬山に詣てける。(32・ウ)小野の里を通るとて、小町寺を訪ひ、

小町寺や哥よむ鳥に感し入

鞍馬山も程近き山際に畚卸を見て、

軽捷の兄か弟か畚おろし

初春雪登鞍馬山

鞍馬真仙境　風光異俗寰
況逢春雪下　高入暮雲間
樹々皆銀樹　山々總玉山
林亭時買酒　酔裏冒寒還

石清水へ詣て、

凍解る声も新し石清水

鳥羽の恋塚にて、

恋つかやさかれる猫の哀なり

登華頂閣

高閣岧嶤洛水涯　登臨日霽対煙霞
玉楼金殿三千戸　半映垂楊半映花

東寺にて、

半分の上ハ霞や五層塔

八坂にて、

(32・オ)

(33・オ)

(33・ウ)

鴨川遶麓浄　雁塔竦巓奇
探勝元無限　帰期幾度移

月下小飲

萬里雲晴月色涼　厭々夜飲酌清光
坐中殊有風流客　酔後謾歌湛露章

中秋

去歳中秋墨水遊　今年又在鴨川頭
東西為客無常跡　対月思郷独自愁」(27・ウ)

九日寄湯地子志

九日独居鴨水隈　蕭々風色客思哀
開窓空憶登高興　把筆偏慚落帽才
唯有籬辺黄菊発　竟無門外白衣来
知君遠追慕龍山会　勝地遨遊尽酔回

清水(ヒ)へ行ける帰るさ、利休といへる河漏やへ遊ひけるに、籬の菊の盛なる、娘の年も二八なる名さへ哥知といへる」(28・オ)

舞妓の、茶(ヒヒ)よ酒よ給仕するを見て、

ませ竹と成て添たし菊の花

客舎秋夜

秋夜南窓下　凄風冷客衣
陰虫吟艸砌　密雨撲茅扉
萬戸砧声急　三更燭影微
此時難作睡　反側益思帰

島原見物に行て、

粧ひを凝すや菊の色競へ

遊知恩院

秋陰忽霽景光新　瀟灑梵宮出世塵
風静山楓飄錦繡　露清籬菊濯金銀
諸天日暮疎鐘響　僻地人少宿鳥馴
時有老僧来捧燭　談玄説法興情真」(28・ウ)

黒谷にて、

黒谷や宗旨違ひの菊の色

真如堂に紅葉を見て、

紅葉、の照も真如の光かな

拝北野廟

菅公尊廟　帝城辺　祭祠厳然俎豆」(29・オ)連
赫々威霊輝后土　明々大徳配皇天
千株(百)梅樹清容老　萬歳松林翠色鮮
多少(ヒ)文章懸日月　千秋不朽至今伝

色替ぬ松の操や神の庭

平野に詣て、

柏掌の音も澄けり秋の風

遊金閣寺

池水浸金閣　松林遶玉堂
園中元自好　況復帯秋光

今宮に詣て、

広前にあまれる秋のけしき哉

大徳寺にて、

松青く楓ハ赤しむらさき野

上加茂に詣て、

紅葉、に交りて朱の鳥居哉

遊赤山

壮遊偏悦出塵寰　黄菊丹楓照赤山
偶坐園碁堂上客　子声蕭瑟夕陽閑

東福寺看楓

通天橋上一登臨　渓水潺々秋色深
千樹丹楓如錦繡　何須長者布黄金

関白高司卿(鷹朱)別荘見菊

別業清然鴨水傍(ヒ)　玉簾風動菊花香
興情自勝陶家趣　酒満芳樽客満堂」(29・ウ)

高雄山賞楓

城西名嶽号高雄　萬壑千峯如鬼工」(30・オ)

早踰中山道　浮雲満翠微
晴風吹樹去　冷露湿人衣

矢矯橋

長橋三百歩　虹影映波新
並渡繁華子　總非題柱人

野間の内海を望て、

一面に玉苗青し古せん場

今宵ハ鳴海の駅に宿りける。」（24・ウ）さらぬたに淋しき旅の空に、五月雨のふりしきる折しも遠寺の鐘の聞へけれハ、

さ月雨ふる里慕ふ夕暮の鐘もなるミの浦そ淋しき

夙発鳴海駅

暁雲連大海　残月洩疎松
前路無行客　唯聞遠寺鐘

熱田の宮に詣て、

柏掌の音に匂ふや花あやめ

筆捨山を望ミて、」（25・オ）

捨た筆拾ふや山の夏気しき

五月雨の降しきるに鈴鹿山をこゆるとて

田村麻呂の事思ひ出す。折しも馬士のあた口を聞て、

さ月雨ふれるすゝかの山道は鬼ころしても呑にや及ない

草津の駅にて姥か餅喰ふ時、

つしか花着た嫁もありうはか餅

高津

一上高津石磴斜　巍然神廟映烟霞
謾銜盃酒茅亭裡　俯瞰浪華十萬家

遊生玉之亭

林亭一望午風涼　二八紅顔勧酒觴
酔見芙蓉池上色　始知不及美人粧

遊兎道

探幽遊兎水　々々自潺湲
古寺皆名寺　連山尽好山
高僧仙跡止　猛将戦場閑
日暮橋頭店　喫茶一解顔

従東都到京師客舎作

一日辞東武　蕭然滞　帝州
客中重作客　愁裏更添愁
杯酒誰同酌　詩篇独自謳
望郷思不絶　強到鴨川頭」（26・オ）

旅館の暑さにたへかねて、

暑さゝへ亦格別の都哉

祇園会にて、

せり合や人の暑さと我暑さ

音羽の瀑布にて、

寒ひ程涼し音羽の瀧の雪

鴨川納涼

橋辺把酒望河山　山秀河涼興不閑
十里連綿茶店燭　清光偏照美人顔

仝

綺筵新設鴨川頭　三伏風涼似九秋
遊客夜深頻尽醉　高歌携妓各帰楼」（26・ウ）

昼寝

夏日清風至　曲肱北牖中
莫言同宰我　欲偏夢周公（下上（朱））

謾成

高士風流脱俗塵　不求富貴不憂貧
春花秋月唯愛酒　謾酌賢人與聖人

遊清水寺

攀躋清水寺　佳景甲京師
山嶽如開画　瀑泉似掛糸」（27・オ）

東叡山看花

上方春色入看奇　朱閣紅花映緑池
野鳥頻啼芳樹裏　慇懃自似需吾詩

飛鳥山看花

樹上名花樹下人　人嬌花美弄芳春
芳春不駐如流水　莫笑興来斟酒頻

」(21・オ)

吉原

青楼高架墨川傍　倡婦娟々対翠楊
皓歯朱唇巧含笑　蛾眉螓首更凝妝
絃歌日霽新声麗　杯酒風生美味香
酔後催眠多少客　錦衾春暖止鴛鴦

渡墨川

春艸萋々墨水頭　王孫昔日此遨遊
遺歌為咏扁舟裏　仍旧猶看白鳥浮

」(21・ウ)

梅児墓

偶弔梅児墓　寂然傍水汀
千秋名不朽　柳樹到今青

常園寺の桜見にまかてけるに、千年も経たるはかりの一樹庭上にはひこり、玉をつらねし如く花の咲しを愛て、あるいたり又休んたり花の影

染井の植木を見に行けるに、金谷の花のにしきに増りぬ。

花も葉も種□□(虫、々ニカ)染井の植木哉

日暮里にて、

日暮や春の日あしも長からす

御殿山の花見に行て、とつかりとすハるや花の御殿山

御殿山見花

御殿山頭花樹新　萬人携酒宴遊頻
芳春詩客元無隔　春促詩情詩賞春

遊東海寺寺有潮音閣

寺開東海側　松樹満庭深
閣上望無限　潮音雑梵音

」(22・オ)

弔大石氏墓

巍々大石氏　忠烈動中原
輙(忽)報邦君恨　竟酬国士恩
百年墳墓古　四海姓名尊
此日天涯客　弔来涙欲呑

遊東禅寺　門掲海上禅林四字

海上禅林眺望開　波涛萬里入窓来
紅塵不到青松下　颯尓涼風唱快哉

」(22・ウ)

送安井子全帰日州中路入於京

師而遊学焉　長尾龍

送客偶逢新雨□(虫、晴カ)杜鵑啼血祭離情
芙蓉好聳吟肩望　湖海須回画舫行
杖策自嘗尋覇略　逐師猶更入　王城
江山別後雲千里　夜々書窓剰月明

二

風騒負笈倦遊郎　京洛煙花慎酔狂
離恨不堪千里別　吟情欲断九回腸
孤亭独夢郷天遠　復水重山客路長
学就明年帰国日　昼行人羨錦衣裳

東都一年の住居も事故」(23・ウ)なく、さ月十日あまり一の日朝またき、人々に別をなし公邸を立出。程なく六郷川を渡り、後を顧れハ無端更渡桑乾水却望并州是故郷と、唐人の作りし詩ににたり。

状一つ江戸へ頼ん小鰺賣

遊清見寺

宝地風光世界稀　浮波三保入幽扉
晩来雲掛青松樹　疑是天人曝羽衣

」(23・オ)

早踰小夜中山

」(24・オ)

酔に乗して萩寺の萩見に行ける。

萩と〳〵共にせり合色香哉

題千駄萱　公園

芳園俗少傍山村　緑竹丹楓遶屋繁
最愛四隣幽鳥静　不関城市管絃喧

新日暮に遊て、

染上た園の艸木や秋の色

友とち打つとひ、祐天寺より目黒へ到りて」（18・オ）

桃葉のにしきを縫や瀧の糸

比翼墓ハ、白井権八小紫恋路のしるしとて梅の古木あり。

紅葉する連理の梅や比翼墓

客中九日

佳節蕭條旅恨催　思郷強上望郷台
山川總是非吾土　涕涙偏能滴客盃
徒有西風吹帽去　竟無北鴈寄書来
縣知此日家園裏　三徑就荒黄菊開

麻布の何かしの家に、三四歩に」（18・ウ）

はひこれる菊の名も世界の図と云るを見て、

菊奇也是仙人の世界の図

月夜泛墨川

墨川最好月明秋　多少騒人此賞遊
曲渚唱歌同北渚　高楼酌酒似南楼
橋頭素影随行客　波上清光射宿鴎
幽景幽情共無限　唯恨銀漢向西流

海晏寺看楓

蕭寺卓然滄海傍　丹楓千樹曝秋陽
此中更有風騒客　揮筆謾裁錦繡章

」（19・オ）

深交集と云へる行厨の銘を、ある人の乞けれハ、

花に月に替ぬ味や雪の友

予講書於南寮及北舎

君公賞賜酒時十二月二十八日也大雨

雪予適寓直

白雪随風下　紛々入玉欄
君恩殊賜酒　寓直不知寒

歳暮得家書

客居守歳客情頻　今夜不図雁信臻
書札新開寒燭下　慇懃恰如対家人

」（19・ウ）

守歳のつれ〳〵に筆を揮て、

一夜妻と寝たる心地や年一夜

千里の客居も恙なく一年の坂を越て、新玉の年を迎へ、めて度東都の春に逢ふも偏に堯天の賜也と、大広間に直して、

はつ春と云御客あり玄関前

」（20・オ）

東都新歳

東都春色到　笙歌起萬家
並駆諸侯駕　粲然映彩霞

遊両国橋

大川連百里　長橋跨二州
上有錦衣客　下有木蘭舟

與長尾雲卿同遊萩侯別荘

奪将金谷趣　芳樹満園奇
花媚如開錦　枝垂似掛糸
異香遶大厦　清影照方池
遊客殊騒客　弄盃兼弄詩

東都客舎送伊東信卿帰嶋原

新知騒友旧賢良　少小学優名姓香
萬里求師甘旅食　三春従父促帰装
雄心自帯青萍剣　長路応成白雪章
只恨相逢忽相別　慇懃握手勸離觴

」（20・ウ）

三島駅

雨晴三嶋駅　玉殿接潮流
知是神仙任(住)　何用(須)問十洲

踰(ヒ)筥根山(ヒ)

筥根遥接白雲中　八里連山一径通
湖上龍吟催急雨　関辺虎嘯起悲風
棄繻謾比終軍妙　叱馭空思子贛忠
此地由来如剣閣　騒人勒銘(把筆勒銘(朱))彩毫工」(14・ウ)

同し所にて、

しける木(の(朱))を梢(ヒ)を行や箱ね山

宿筥根駅

一宿筥根駅　恰如洞裏天
芦湖開嶺上　芙嶽聳雲辺
少婦頻留客　老翁或学仙
偏乗塵外興　酔後自忘眠

酒匂川ハ古へのまりこ川なり。」(15・オ)此川にて梶原か鎌倉殿へ水を蹴かけし時、鞠子川蹴れハそ波のあかりけると云しむかしおもひ出しつ、、波を蹴あけて打渡り、小余綾磯をも見過て、心なき身にもあわれハしられけりと西行のよミし鴫立沢の跡を訪ひ、

心ありや鴫たつ沢の郭公

大磯の駅を通りけるに五月雨の」(15・ウ)

もの淋くふりけれハ、虎女のむかしをおもひ出して、

五月雨や木影にしめる虎か石

一駅〳〵あゆミ過て、五十三駅も已に尽、馬士のあた口もけふを聞おさめとし、さ月六日の午の頃東都の　公邸につくそ嬉し。

江都

江都旧是比周京　地勢坦然千里平
緑水深湛東(*)叡麓　青天近接北(*)」(16・オ)辰城
公侯車馬縦横去　市井絃歌日夜鳴
聖(*)主賢臣共堪(頌(朱))。四夷賓服楽休明(原本、*印で一字分開ける)

両国橋の涼にて、

三国にない両国の涼ミかな

洲崎の弁天に詣て、

涼しさの果ハいつこそ海の面

初秋夜坐

初秋残暑薄　夜坐早涼生
月映江波冷　露瀦庭艸清
隔窓驚一葉　把酒到」(16・ウ)三更
已感悲哉気　凄其益客情

客夜聞擣衣

蕭條秋色満江城　月冷風寒客恨生
此夜擣衣千萬戸　声々總作断腸声

中秋無月酔後走筆同壹岐道夫賦以前然年為韻

中秋寂々旅窓前　樽酒斟来興勃然
浮雲敝月関何事　良會良霄隔一年

同前和道夫韻

良夜朦然雨未晴　窓前思月酔空成
唯歓坐客皆騒客　詞賦翩々似屈平」(17・オ)

猶言やます、誹句に及ぬ。

むさし野、月今宵ァ、雨の空

五百羅漢より吾嬬の森に詣て、

しミこミし秋のけしきや神の森

夫より梅屋敷に到り、

紅葉して二度の誉れや梅屋敷

と云捨て亀井戸の天満宮へ詣て、泉上の酒店に杯を把て、

亀井戸や新酒の泉湧かゑり」(17・ウ)

河流接海浪花津　芦荻青々満岸新
萬国舟船斯輻湊　屢随潮汐去来頻　」（11・オ）

夜雨溯澱河

日暮長河上　扁舟解纜行
篷窓陰雨滴　蘋渚暗風鳴
客意思千里　鐘声報四更
時聞傍人語　僅到澱之城

雨のいたくふりけるに、湖水の辺を行ける。

八景を一つにふるや五月雨

天龍川

天龍又天龍　夾州流如走
佇立岸頭人　応俟同舟友　」（11・ウ）

早発藤枝駅

早発藤枝駅　行々道欲迷
山亭人未起　残月照扉低

業平中納言の、夢にも人にあわぬなりけりとつらね玉ひし、蔦の細道を通りける折ふし、郭公の声を聞て、郭公是ハ夢かや宇津の山

又かんこ鳥を聞。

聞つらし蔦の細道かんこ鳥　」（12・オ）

同し所にて、薯蕷を喰ふとて、甘さよと手をうつの山芋の味喰ふ度々に咽ハ

業平

行々て江尻を過、興津も近く清見潟を行けるに、三保の松原漸見へ渡りぬ。此地や、西より東へ一里はかり海中にさし出、青々たる松樹の浪にうつろうけしき、真に扇面の画に似たり。清見か関の跡ハ清見寺の門前也。」（12・ウ）清見寺ハ巨鼇山として絶景の大刹なれと、日の暮けれハ、帰にこそと云て本意なくも見侍らす。田籠の浦ハ方角抄に、三穂の入江より浮島か原おしなへての名にして、清見・沖津も其中也とそ。誠に無雙の佳景にして、古歌もあまたあれと記しはへらす。清原滋藤か、漁舟火影夜焼浪駅路鈴声夜過山と唐歌を」（13・オ）つらねしも此辺にして、其景色辯を子貢氏にかり、筆を史遷にかるといへとも、〔述尽しかたけれハ〕（朱）そのまゝもたして興津の駅に宿りぬ。

踰薩埵山

雲山高聳大溟辺　絶壁危岩一路懸
打岸波瀾飛白雪　生峰松桧払青天
聞猿忽下思郷涙　駐馬空吟陟岵篇
旅客由来欣楽少　何驚両鬢已蒼然

吉原ハ富士の正面にして、主客」（13・ウ）相対するか如し。此山ハ天下無双の名嶽なれハ、一見の志多年なりしに、今見る事の嬉さハ亦云へくもなし。殊更萬里の空晴て一点の雲なく、風に靡く烟ハ行衛もしらぬ西行の思ひを動し、鹿子斑にふる雪ハ、業平東下りの筆をそゝのかすに似たり。古賢の詩哥も数多なれハ、今予か巴調を添ふへきにあらねと、絶景にうなかされて、蛇足の」（14・オ）譏もかゑりミす一詩を賦する事爾り。

富士山

芙山如画裏　海内独巍然
大麓連三国　高峯接九天
四時留白雪　萬里見青煙
仰止風塵客　凌巔欲問仙

九州も已に去て、右に（左（朱））中州の浦々を見、右に四州の島々を見（ヒ）るうち、青島といへるを見て、

青島もます〳〵青き新樹哉

渡朝鮮洋

水水々大洋涵九天　由来此処号朝鮮
浮舟自奪朱公楽　撃楫何慙祖逖賢
藍島煙霞映波起　松山城闕與雲連
旅人偏愛風光美　忽散郷情樽酒前

」（8・オ）

讃州の海を渡りける折しも、卯月十五日の夜の空も快く晴たるに愛て船上の楼に上れハ、圓々たる孤月海上に浮て、浮光金を躍し、清影璧を沈め、三公にも換さる江山の佳景也。たまつて居らるへきにあらねハ、

ミしか夜や繋留たき月の舟

と云つゝ、舟もやゝ行けるに、是こそ」（8・ウ）

八島よ、檀（ママ）の浦よと人々の指に随て見れハ、巍々たる高山、漫々たる大海、誠に佳景と云つへきも、是（コレ）なん源平の古戦場、今更懐古の情を催し、

むかし聞ハ麦の秋風もの悲し

八嶋懐古

源平昔日此屯兵　多少英雄決死生
濁浪至今如奏凱　陰雲仍旧似翻旌
漁人或弔千年跡　戦士空留百代名

」（9・オ）

四顧蒼茫滄海色　題詩旅客独傷情

牛窓の浦に舟の入ければ、ある酒店に杯を傾けるに、窓前の景面白きのミかハ、出舟を惜むむすめあれハ入舟を悦ふ妻ありて、いと賑き浦浪のよるへ定ぬ旅の身を、酒店の窓に打くつろけて、戸口からあまるや海の青すたれ

牛窓夜泊

渺々牛窓港　孤舟繋晩汀
潮来前浦」（9・ウ）白　月出後山青
客枕難成睡　漁歌不忍聴
明朝好沽酒　求友酔津亭

けふ予か舟の経る所ハ、高砂の尾上の松を弓手に見、浪の淡路の島影を馬手に見て、此浦舟に帆を揚るそうれし。

帆ふくらや名所〳〵の風薫る

赤石浦

赤石浦辺朝霧晴　舟帆島樹入看清
仙翁不見今安在　空咏遺動歌感情（下上（朱））

」（10・オ）

須磨の浦を経る時、

青葉ふく風哀也須磨の浦

経須磨浦

天霽須磨波浪平　看山望海任舟行
遥聞薄暮漁人笛　孤客忽催懐古情

敦盛墓

千歳荒蕪一谷営　佳人墓古緑苔生
林花猶帯紅顔色　野鳥空伝玉笛声
掃地村翁談往事　看碑旅客慕英名
留笻歎息長松下　不覚斜陽海上横

」（10・ウ）

和田の岬にて、

海原に一筋涼し松の風

楠子墓

楠公名悳旧無倫　一仕南朝功業頻
竭智遺謀桜井駅　顕忠致死湊川浜
萬人同貴邦家宝　千歳偏仰社稷臣
此日弔来墳墓下　威霊赫々至今新

浪花津

前灘浪静無投璧　逆旅人和不絶糧
預識杳然東海道　明星従駕有輝光

黯然として銷魂と江淹か別の賦に書し筆の跡も今更感に堪すして、予も留別の句を綴り待れと、元より拙きしらへなれハ、離情の多きにくらへてハ九牛か一毛も述得さるそ、本意なし。

咲揃ふ花や故郷の置ミやけ」（4・ウ）

留別諸君

奉恩遥赴武昌城　一歩飄然萬里行
親友為歌三疊曲　征夫偏惜百年盟
山川日霽離盃浄　道路春暄旅服軽
西鄙東都従是隔　鯉魚莫絶故人情

と筆を留て彌生の十日人々に別れをつけ、丈夫涙なきにあらす離別の間に灑すと云すて、宿を立出なかむれハいつこも同し春の曙、黄鸝の声いと」（5・オ）面白けれハ、黄鶯も謡ひつれたる首途哉

申も下りなる頃吾平津に到りけるか、末吉丸といへる予か乗へき舟の外浦より来されハ、何かしか家を旅の舎としすミけるに、折ふし鰹の多けれは鮑魚の肆臭き事堪かたし。明る日ハ同し舟に乗玉ふ人々の旅館を訪ひ千々の物語りにつれ〳〵を忘れ」（5・ウ）帰て旅館に独坐すれハ、浦の童の謡ふ声ハ波の音に争ひ、港に繋く舟の男ハ檣の下に眠り、魚干す女ハ猫を追て庭上に走り、魚取んとする烏ハ屋上に集りて、人を恐ぬ面魂を見る迄、孤客の伽と成侍りて、思す夕飯時になりぬ。またの日ハ春雨蕭々と、語ふ友も渚の家に枕を伽とする外ハ他なし。」（6・オ）

春雨や枕の上に飛胡蝶

外浦の舟中にありて、舟の出んことを願ひて、

浦舟の纜を解柳かな

泊外浦

江山如赤壁　佳景入看新
垂釣波涛暁　繋船楊柳春
元非横槊輩　謾作賦詩人
時有豪遊客　携樽此問津

舟中のつれ〳〵に朽木の譏も顧す、来る日も〳〵枕を伽とし」（6・ウ）たゝ昼寝をのミ事としけれハ、

浦浪のよる昼となき楫枕ねてハ超（ママ）てハ喰てハ亦寝る

末吉丸の主、安藤氏の亭にて、

卯の花になミの争ふ垣根哉

卯月五日舟の出るとて、

ふり帰り見るや港の夏木立

島の浦に舟を留し中、佛生会の日、福寿庵といへる古寺に同舟の人いさなハれ」（7・オ）

ける浦辺に、郭公を聞て、

郭公の跡漫々たり海の面

鎌江の港に舟を繋ける折しも、麦秋の浦にきハしく謡ひ囃すを聞て、

一つれハ歌て麦刈鎌江哉

鎌江夜泊

海色茫々夜色幽　孤舟偶繋鎌江流
潮声寤睡蓬窓下　一点漁燈照客愁

舟中作

晴風颯々発軽舟　萬里波平臥枕頭
款乃声中驚睡処　日州已去更豊州」（7・ウ）

今茲季夏卒役而帰焉塗(ママ)官游于京師始与予不佞款一日出示其所著紀行一篇曰此予旅況之所最也請為題一言予因謂之曰凡物皆有可観苟有可観此有所楽而向之所楽俛仰之間以為陳迹纔為陳迹則後必有可観而向之所楽者為之忘焉后之所楽者又為其后者所忘是豈向之所楽者非而後之所楽者是哉蓋天地之間往者退来者進自然之理也而在其間往来不止既観古於今楽今於後者夫唯文字歟是以古人興感之際必假」(1・オ)

此物以不朽其楽也所謂不朽者文其不然乎想君帰郷之后遠探昔遊于此書雖今昔俯仰之異亦可以当臥遊云尓

文化丙寅夏五

友人粟州岡敏書

(岡敏)(公訥)

」(1・ウ)

自序

漢の楊(ママ)子雲大(ママ)玄を艸す。ある人これを嘲て曰、玄尚白と。予か此輯ハ亦大玄にはるかに劣れハ、ある人のあさけりハ元より期する所也。しかれハ尚白の字を標題として解嘲を作るに心なしと云ふにそ、ある人予か言を難して曰、もし子か言の如くならは、徒に嘲を後世に遺すのミ。徒に嘲を後世に遺すのミならんよりハ」(2・オ)寧此輯なかるへしと。予黙々として筆を揮ひ、ついに尚白集と号け、亦解難をつくるに心なしとしか云ふ。

文化三のとし

滄洲題

(滄洲)(安井完印)」(2・ウ)

尚白集　　滄洲　安井完著

今茲文化一のとし、君命の重きを荷ひ東都の遠きに赴かんと夏に始て行を啓けハ、親戚のひと〳〵朋友のかた〳〵別れを河梁の上に送りて柳を攀酒をすゝめて名残を惜ミ玉ふのミかハ、くさ〳〵の玉吟を恵ミ玉ふおゝけなさをそのまゝこゝにかい記しぬ。

送別　　日高吟水」(3・オ)

白髪如糸何足嗟　今朝別後令名加
加之道路春風裏　処々銜盃桃李花

弥生の朔日に旅立へかりし人の、舟のしまハて延けれハ、

たち延て名残ハ深し藤の浪

滄洲雅公の東へおもむき玉ふを賀し奉りて、

江藤和暢

帆ふくらや跡ハ夕日のまつの花　矢野雨律
仝　　」(3・ウ)
土産をは忘れ玉ふな江戸さくら　湯地遊夕
仝
色まさに日向へ帰れ江戸桜　石黒恕来
仝
うミ山も皆麗な旅ち哉　太田三圭
仝
道艸も尚行さきも花の江戸　矢野学乎
仝
首途や花の都に花の時

奉送滄洲先生之武州　湯地貞教

先生承命発家郷　弟子留行勧別觴　」(4・オ)
蹊路暁風伝玉笛　河梁春色映垂楊

とする跡より、お、い〳〵と声かくる。我等敦盛ならね共、こや直実にやありなんと後を屹と」（19・ウ）見返れハ、熊谷ならて熊右衛門、おのれか家ハ狭けれハ迚、姉の新宅に伴ふ故、何か猶豫のあるへきと一蓮詫（ママ）生宿かりける。明れハ都於郡を一見せんと夙に右松の駅を立、足をはやめて」（20・オ）先大安寺に到り、桂円公の尊廟を拝しけるに、香花の手向も久く絶て苔むす石と成替り、た、嶌の経読声を捧るのミ也。浮舟の城ハ八陣に象り、八つの口を開し名城なから、時運」（20・ウ）いかんともする事なく、蹴鞠の場ハ草刈場と変し、か、りの松空く残り、楼閣の跡ハ荆棘生して、狐兎の栖所となれり。嗚呼此地に遊んて誰か涙を流さ、らん。大中寺・黒貫寺をも見終り、佐土原へ」（21・オ）到り、祇園町に休ふ。油屋藤助風子、若鮎の酢に酒肴を携へ、今を盛の藤棚の下に席を設けて、もてなし玉ふ。

藤さんかどうても是ハ藤のゑん　説

おほろ〳〵に結ふ糸遊　藤助」（21・ウ）

夕陽已に西山に近付けれハ、別離の言葉を言捨て、久峯に登り海上の景を見る間もなく、雲霞の如く群り集る錫売のやか（ママ、路）ましさに飛か如くに山道を下り、塩治の住吉二柱の明神」（22・オ）、檍原の宮に詣て、長閑さや檍か原の浪の音　海

春の小鯛を得たる釣舟　説

はら〳〵と麦も此ころ穂に出て　明

此辺より夜に入侍れハ燈に道を急きしま、、初更のころ」（22・ウ）五明子の宅に荷物を卸しぬ。二十四日の辰も下りなる比、眠を覚し、南海子に申送る。

解やらしもつれ合ふたる藤蔓　洲

程なく市中の人々訪来り玉ひ、酒盃の興や、深く、五明子の」（23・オ）もてなし大形ならす。

五明子にいさなわれ、米ら山に登り、麓を廻りて、

鴈金にいさなわる、や峯の花　説

五明子に一宿の恩を謝す。

色に香に心こもるや花の宿　洲」（23・ウ）

長倉君のお供に召加へられて、お恵ミの杖に引れつ花の旅　海

安井先生に賀して狂歌を奉る。

しよほ〳〵と春又雨をたのしめと裾ぬれるのハかゝやしるらん　杵松

猶しも興は尽されと、いつれ」（24・オ）留るへきにあらねハ、再会〳〵の別れの辞に、則めて度筆を留ぬ。

享和二春三月

緑竹園主人

滄洲記」（24・ウ）

三　尚白集

」（表紙）

安井君子全日向之人客歳以藩之役在于東武

山の神坂の峻しさ亦云ふへくもなし。木を攀、岩を伝ひつゝ漸」（13・ウ）頂に登りぬれハ、回臨飛鳥の上に出たり。

うつむいて雲雀詠る峠かな　洲

安井君を米ら山に〔伴ひ〕申て、山の神坂にてさゝけ申。

君見よや山の峯にハ花はから　海」（14・オ）

弥生の末、米ら山に時鳥を聞て、

見たはから夏ハ近ひそ時鳥　説

はから申なとゝ、米らの訛を米ら山の句にもちこミ玉ふ面白さに、うらふれし足もかろ〳〵と屺原に着。稲荷明神の廣前に」（14・ウ）額突て、

玉垣の内外長閑し稲荷山　説

花にまた彩る朱の宮居哉　洲

稲荷山の桜を見て、

山桜今を盛と咲つれて春の詠めそ長閑けかりける　海」（15・オ）

今宵ハ社司甲斐右近の家に宿りけるか、四隣の喧しき煩ひもなく、たゝ一つ家の静けさハ誠に浮世の外にして、仙家も斯やとおもハれける。夕けの膳も餐なくして、最淡き羹に山椒の実の塩漬を」（15・ウ）飣にせしも、古風めきて見へぬ。二更の頃、互に臥けるか夜るの物とてもなかりけれハ、山中の余寒堪かたし。

弥生まて榾火をせゝる旅寝哉　明

明れハあるしに暇を告て、帰路に」（16・オ）趣く。此度ハ尾泊りといへる道を越ぬ。米ら侯の館へ通ふ腰の尾の橋ハ、聞に身も冷へ膽を消す桟橋なれと、道の便も悪かりけれハ本意なくも見待らす過ぬ。此あたりの峻しさ、書に筆ふるひ」（16・ウ）言ふに口おのゝきぬ。俯て千丈の澗を臨めハ、碧水藍を湛し如く、仰て萬尋の巓を見れハ、白雲帯を纏ふに似たり。されの坂無雙の截所にして、崎嶇たる厳石（ママ）行易からす。蹶くものあり、這もの」（17・オ）あり、退くものあり、進むものあり、あるハ危石の下にイミ、あるは芳艸の上に休ふて、連山の遠近を目送すれハ、山中の春色旧来遅く今や弥生の末に及ひ山桜のしろ妙なるを見れハ、寒厳ヒ二月四」（17・ウ）始て花を見ると作りしも猶宜なる哉□とこそおもひ侍りぬ。

遠近の山ハ深雪かしら浪か鹿の子またらに扨ハ桜か　海

誰待て咲か弥生の山桜　明

とかうするうち峠に到れハ暫く」（18・オ）息を継んと煙草の烟の中よりも、彼は一房よ、是ハ白髪よと指す所皆名山ならぬハなし。是より少しハ道も行よけれハ、輙く尾泊りに到り、行厨の助けに力を得て、弓より曲る細道を矢の如くに飛行」（18・ウ）初瀬寺に詣ぬ。三躰の佛像高き事二丈はかりもありぬへし。門前の仁王最古久たり。鞍馬の昆沙門より山路の里に下りて、

名にも似ぬ山路の里や鳴かわつ　説

〔国分寺より〕妻満宮（八脱）へ詣てけれハ、日影も已に」（19・オ）入相の声に其まゝ立帰りて、右松の熊右ヱ門に一宿を乞んと尋けるに、折しも留主なりけれハ妻の町へ行ん

坂を今そ上れる　海

とよミけれハ、しはしハ雨もやミけるゆへやう〳〵身投か嶽に到る。爰なんそのかミ和泉式部法華嶽の薬師に誓ひをかけしに、終に願ひのかなわされハや」（8・オ）

此嶽に身を投しよりの名也とそ。　説

身ハ落て花ハ残れり身投嶽　説

散花も昔のさまか身投嶽　洲

いにしへを思ひ出よとや落椿　海

あわれさよ身投か嶽に鳴かわつ　五明

此地や山海東南に連り、晴日の」（8・ウ）眺望画裏の如きも、けふのミ雲霧曚々として咫尺殆辨しかたく、猶六朝の僧あらん事をと餞起か江行の詩に似たり。法華嶽の堂閣頗る壮厳也。一国の昔造営ありしと聞も古へを思ひ出して、」（9・オ）

誓ひ置し佛の恵ミたのもしき老木の花の色香ゑならね　説

和泉式部の弾せし琵琶あり。誠に千歳の古物にして四ッの緒も絶〳〵なり。

聞人のなきをあわれむ四の緒の」（9・ウ）そのぬしたにも苔の下とハ　説

むさんやな昔の人ハありもせてひわに残れる名のミなりけり　海

ひわの音を今ハ啼けり金衣鳥　洲

ひわ崩て猶淋しさよ春の雨　明

客殿にしはらく休ミ居けるに」（10・オ）寺僧いとねもころに、酒よ肴よともてなし玉ふのミかハ、是非に一夜の労を休めよとひたふる留め玉へと、前途程遠けれハとてつれなく結縁の袖を振はなてハ、嚮導師を添玉ふおゝけなさを」（10・ウ）力艸に、山坂の溥道を下りて蓬初（愛染）川八代の原を通り、籾木の里に草鞋を脱（ヒヒ）けるか、夜もすから降つゝく雨の音寂々として軒の雫いと淋しかりける。

終夜夢をたゝくや春の雨　洲」（11・オ）

春雨や軒の雫の音はかり　海

春の夜の夢結ふ間もなく五更の鶏に枕を上れハ、雨やミ風も静也。人々悦ひの眉を開き、名に高き米ら山に登らんと競ひ餱糧を橐に嚢に裹ミ、爰に」（11・ウ）方めて行を啓き、きのふのうさを昔語りにして、已に駄留の坂に到る。是よりハ馬の通ひ路も絶ぬれハの名也とそ。あやしけなるあはら屋二軒ありて、人家も是を限りなれハ渋茶に咽を湿して、」（12・オ）

駒留よ雲に入日の春霞　説

一里あまり行て蕗の水あり。そのかミ空海此地を過し時、往来の渇を救んと此水を湧しめけると云傳ふ。俗説の虚実正しても何かせん。

法の師の種子を蒔けん蕗の水　説」（12・ウ）

花の影すくい上るや蕗の水　洲

花咲や戴て呑ふきの水　海

ぬるんても力を得たり蕗の水　明

行々益崎嶇として殆蜀道の雄を奪ひ、山は人面より起る。

行路春苔緑　山頭老樹翠壁青草深（ヒヒヒヒ）

攀躋雲霧裏　人語驚栖禽（ヒヒヒヒ）　海」（13・オ）

仝

米良難蜀道　翠壁入青天

行々何処息　数里絶人烟　洲

わきまへす其まゝ書しるしぬと、滄洲序す。」(1・ウ)

今茲享和第二の年、清武の宰長倉風説君米良山の佳景に筆を試んと、安井滄洲・宇都宮南海・日高五明・其外調度持二人ミたりを伴ひ、羊腸の嶮を凌き玉ふ。頃しも彌生」(2・オ)中の九日、空も長閑き春風に旅衣の袖を飄し生目に詣ぬ。南海・五明茶よ飯よ携へて此処に待受玉へは、互にたうへて夫より富吉の里を過、穆佐に到れハ、旅路の日和を祝せんとて、」(2・ウ)和田津海の原より出る春の日のひかり長閑きけふにもある哉　南海

春風吹緑樹　遅日花更清

行路多詩興　又聞衆鳥声　仝

悟性寺の鐘ハ永徳元年辛酉、伊東藤原氏の臣、駿河守」(3・オ)祐満の建立(奇附ヒヒ)にして、高砂の尾上の鐘を象りしよし、上に一つの穴を穿ちもろ〳〵の工ミいと細かなり。是より高濱の香積寺に到り、名にしおふ月知梅を尋けるに、一株の古木庭上に蟠り青葉」(3・ウ)蓁々たり。花の時思ひやられぬ。方丈にハ山田何某か題する詩あり。

百年遺愛一株梅　根老枝蟠封碧苔

莫道花開君不見　暗香疎影月明来

時はや午も下りぬれハ餉に腹をふくらして、高岡川に棹し、」(4・オ)范蠡か昔も斯やと言ふ間もあらす岸に着ハ、粟野の宮に詣て、高岡の府のあらましを見廻り、本庄に越、稲荷八幡・義門寺の処々に詣て守永に到れハ、日も呉竹の杖を留て」(4・ウ)酒家の油屋何某か二階に宿る。山水の佳景檻前に連り、蛙の声までも最興あり。則南海か韻を以て一絶を綴る。

酒楼高数尺　山水入窓清

寂々鳴蛙興　却勝鼓吹声　滄洲」(5・オ)

此所の禅林大乗寺の受本にて軽捷の芝居あり。とん〳〵たる大鼓の声にさそわれ人々見にまかてける。

からき世を渡るためとて軽捷の心つくしに来るあわれさ　海」(5・ウ)

最上のお寺さんしやと座本して世をかるわさに渡る本ゆひ　風説

二更の比油屋に帰り、旅寝の枕に眠を催す。折しも下なる座に誰とハしらす声高砂の鐘の如き大音に目を寤し、能々」(6・オ)聞ハ則大乗寺の僧、賤の男の礼なきを咎るにそありける。ア、我釈氏の教ハしらね共、柔和の面を専とし、忍辱の心を第一とするこそ佛の慮にも叶ふへきに、似気なき僧の怒り事も全く」(6・ウ)酒のわさならんと寝物語りの序に、

浮世をは渡りかねたる大乗寺かるわさ受て唯我独損　海

水臭ひ油(酒)てハないそお寺さんわしや油やしや御用心あれ(ヒ)　説」(7・オ)

なと、戯言に東雲も近付ける。廿日ハ金峯山法華嶽寺に登る。さらぬたに行かたき九折の石磴に久堅の雲絶間なく、降しきる雨に登りもあへす。

降しきる雨もしはしハ心せよ」(7・ウ)我この

風薫り来る蓬生の宿　活鮒」（6・ウ）

〈問れたる藪も恥し雀の子　活鮒

千世に栄る軒の若草　白圭

明れハ空も晴やかなれは、活鮒子道しるへして、大中寺」（7・オ）に到る。庭前に堂あり。古の楼門にして一国の昔諸歴家の奇進（ママ）なるよし、今に姓名柱に存して、見るに哀を催ぬ。」（7・ウ）是より浮舟の古城に登りけるか、地形高広にして河水麓を廻り、山遠く水豊に、誠に枢要の地にしあれと」（8・オ）盛衰いかん共する事なく、蹴鞠の庭ハ青草生して、かゝりの松空く残り、楼閣の跡ハ麥はたけと變して、た、」（8・ウ）鴟鴟の飛のミあり。嗚呼心ある人此地に遊んて、誰か古を懐ひ、今を悲まさらんや。」（9・オ）

〈古城の主（アルジ）に残る新樹哉

〈繁る木や楼の跡に斧の音　活鮒

再大安寺に到り、

桂円公の　霊廟を拜しけるか」（9・ウ）春の林花を奉り、秋の雨水を手向る外ハ誰弔ふ人もなく、萋々たる草の中に唯里人の碑を見る道のミありて、蕭々たる」（10・オ）形勢とミに涙の雨をふらしぬ。

〈石にむす苔のミ花を手向けり

所〳〵に寺なと尋て、其より活鮒子に別れ、日暮シや氷室の」（10・ウ）里に行、潮井を尋けるか、道の真中に有て、側なる山に潮權現の宮あり。此井や海を去事三里はかりにして、干満」（11・オ）時を違す、水の味ひ海水に同し。和泉式部も此処に遊ひしよし、其側なる人家の後に墓あり。又歌に、」（11・ウ）

〈日暮しや氷室の里を詠むれハ潮の烟いつも絶せぬ

予も則井垣に立寄、例の拙き一句を留ぬ。」（12・オ）

〈卯の花を杓に咲する潮井哉

是より石松を経、津广にいたり、妻（八脱）満宮に詣ぬ。数株の葉桜道を挾ミ、宮殿堆し。」（12・ウ）境内を徘徊する中、已に午時に及ひぬれハ又津广の町に立帰り、昼食なと遣ひ、帰路に趣きぬ。佐土原に到り、腹も空しけれハ」（13・オ）酢を喰けるに、はや申も下りけれハ、久峯をも其ま、打過、袖に帆掛て足を速めけれハ、やふ〳〵四ツに我家に草鞋の紐を解（朱）ぬ。」（13・ウ）

寛政八丙辰夏四月中旬

安井滄洲

記焉

（蘭室）（朝□）（堂カ）（難読、完カ）」（裏見返し）

二　米良の見塩

米良の見塩」（表紙）

此輯を米良の見塩と号しゆゑんハ、号し我さへ合点ゆかねは、他の人のあやしまんハ猶更なるへけれと、昔より言傳し諺の何とやら似合たる」（1・オ）やうなれは、善やあしきやも

翻刻

凡例

(1) 翻刻に際しては、異体字等を通行のものに改めた。
(2) 清濁・仮名遣いは原本通りである。
(3) 読解の便をはかり句読点を付した。
(4) 誤りと思われる部分には（ママ）と脇に付した。
(5) 補入の部分には〔　〕を付した。
(6) 漢詩は分ち書きでない場合も、これを各句分ち書きに改めた。
(7) 和歌・狂歌は二行書きであるが、一行書きに改めた。
(8) 和歌・狂歌の作者名で、二行書きの上句の下に記されたものは、下句の後に記すことに統一した。
(9) 朱の書き入れは（朱）で示した。
(10) 丁付けは（1・オ）（3・ウ）のように記した。

一　昼寐の友

昼寐の友　全　」（表紙）

寛政八の年卯月中の一日、都於郡の古き跡を訪んとて、友とち四人五人打列立、宿を立出詠むれハ」（1・オ）いつこも同し夏気色のをかしさに愛て、赤江川に悼し、上の町を過、江平に到るころハ、雨のそほ降まゝ」（1・ウ）酒店に立寄、十千（ママ）酒を沽て、貧を辞する事なかれと戯言に酔を催しぬれハ、小笠を取て立か、弓矢の如くなる直道を曲ミひちりに」（2・オ）歩ミつゝ、思ひ〳〵の高噺し、あるハ浄瑠璃小謡に、手の舞足の踏処も覚すしらす行けるか、花か島も花已に散、蓮池の」（2・ウ）蓮もいまた開す、青々たる早苗万頃に連り、田の面の詠めも広原に到れハ、雨もいとふふり頻りける故、腕をまくり裳を」（3・オ）裹て道を急しまゝ、足もいとうらふれハ（つ脱カ）れハ、あるあハら屋に杉葉の下りしを力に、〔こや一休の極楽と詠れしマならんと〕立寄ぬれと、折ふし酒さ〔り（朱）〕けれハ、餉に」（3・ウ）暇らし、其よりひた〳〵橋を渡り、の辺より小道にかゝり、往来の人随ひ、やふ〳〵山と山との合の谷（4・オ）岩爪の權現に詣ぬ。古木森中に影降の楠・冠掛の杉なと云と古久たり。神司三学院のかりき（4・ウ）けれハ、ねもころに昔の事りける故、しハらく足を休めて暇篠を突はかりの大雨に「茂（ママ）一つたそ」（5・オ）悲き」と口号ミ、濡に黒貫寺に到る。堂閣壮麗にして皇たゝへたり。其より大安寺に到り爰にハ、

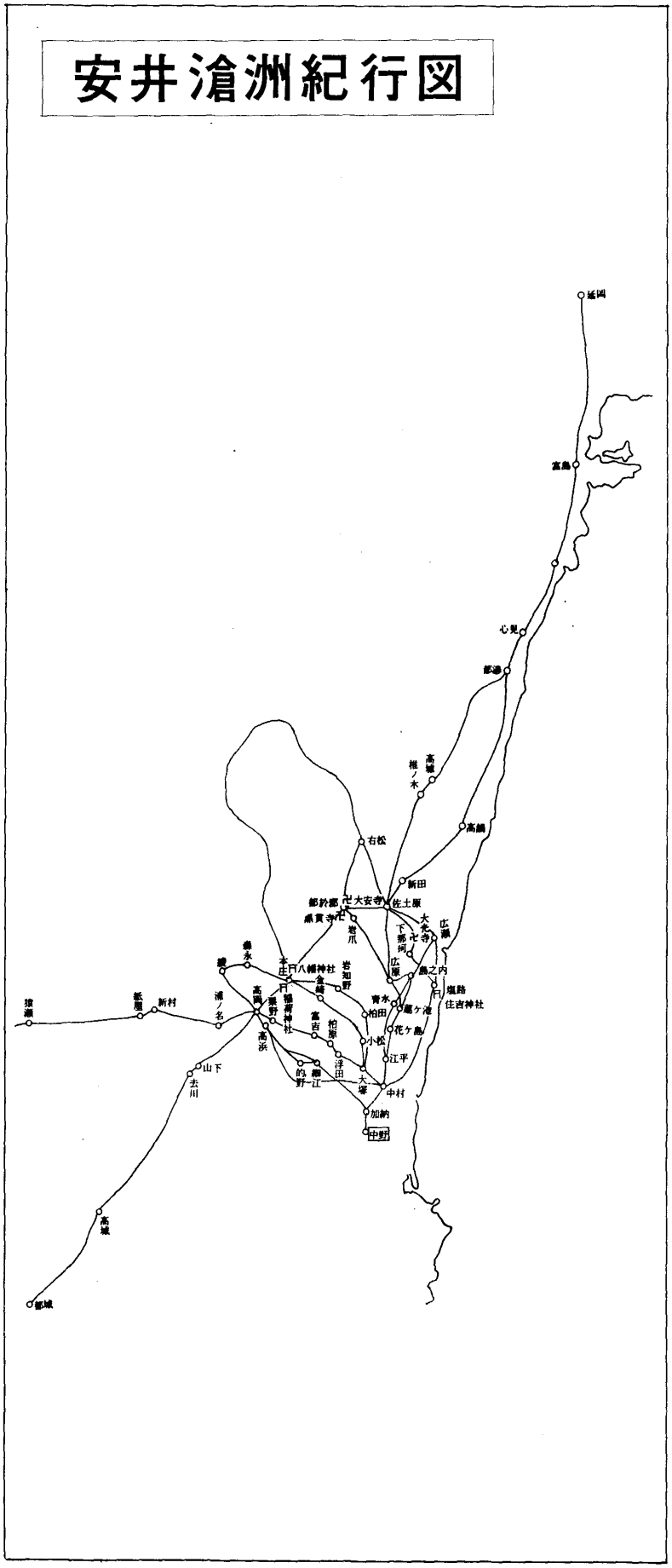
桂円公の尊廟も在しぬれと、降頻弔ふへきやふもなけれハ、「明日と言て」（6・オ）都於郡へ行、鎌田か家に着ぬ。

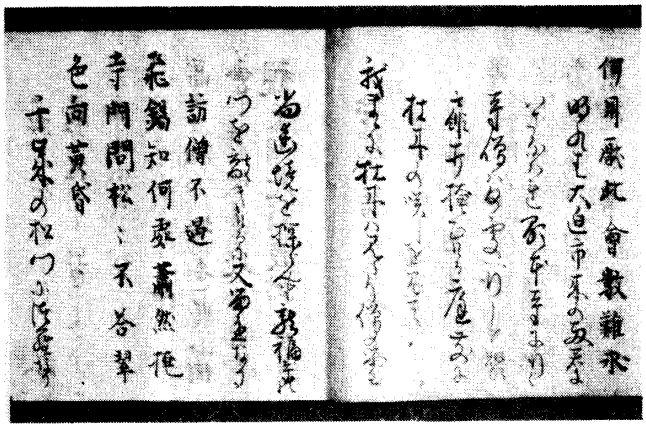
〳〵仰き見れハいよ〳〵高き新樹哉（合点朱、以下同じ）

活がここに窺えるのである。

本資料の存在について御示教を賜った永井哲雄氏、資料閲覧に際して種々御配慮くださった落合国利氏、『あきの名残』の本文を御提供くださり御指導を賜った大内初夫氏、以上御三方に厚く御礼申し上げる。

安井滄洲紀行図





ひとり旅（4・ウ、5・オ）

九　温泉記

文政三年八月十九日より九月九日過まで、霧島山中の栄の尾の温泉（現・鹿児島県姶良郡牧園町内、林田温泉の上手になる）に浴し、山川の佳景を求めつつ、鹿児島を尋ねた紀行である。同行者は史稽・関悦である。だいたいの道順は高浜・浦ノ名・紙屋・猿瀬・栄の尾・国分・加治城・鹿児島・菖蒲谷・脇本・福山・都の城・高城・去川・高岡・粟野のごとくである。

温　泉　記（巻末）

一〇　梅見噺

文政五年閏一月九日より十日まで、高浜の月知梅を尋ねた紀行である。同行者は史稽・智等である。道順は、『梅か香』と異なり、大塚・浮田・柏原・高浜・富吉・柏原・大塚・中村のごとくである。

以上のごとくであるが、三の旅が長期にわたる江戸への出府紀行であるほか、すべてが日向または薩隅の三国内の旅であることが注意されよう。またそれも、七の延岡行、九の霧島・鹿児島行を除くと、ごく近くの村々を巡るものがほとんどで（地図参照）、近郊の勝地を訪ね、雅友と詩や俳諧に興ずるのが目的だったことがわかる。近世後期の地方知識人の生

って浪花の津に至り、そこから淀川をさかのぼって、更に東海道にはいり、五月六日に公邸に到着したごとくである。

京都へは、文化二年五月十一日、公邸を出立し、再び東海道に路をとっている。

最後に、京都を辞して、文化三年六月三日帰家した旨である。

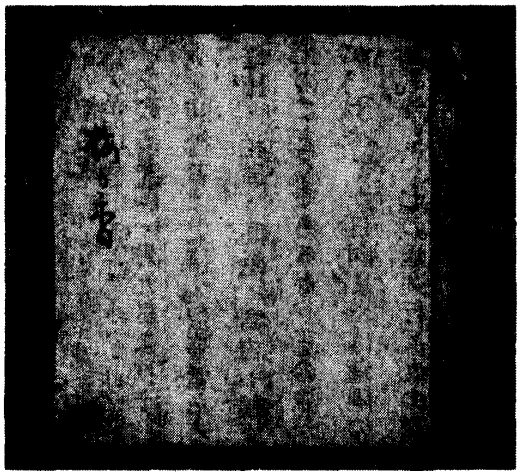
尚白集（2・ウ、3・オ）

四　二日酔

文化十三年六月四日より二日間、佐土原（現・宮崎郡佐土原町）に探勝した紀行である。智門が同行している。だいたいの道順は、江平・花か島・蓮池・下那珂・佐土原・久峯・下那珂・住吉・江田のごとくである。

五　豊の秋

文化十三年閏八月十九日より二十一日まで、佐土原に探勝した紀行である。智門が同行している。だいたいの道順は大塚・岩地野・本庄・都於郡・佐土原・広瀬・青水・江平・中村のごとくである。



梅か香（表紙）

文化十四年正月十日から十一日まで、高浜（現・東諸県郡高岡町内）に香積寺の月知梅を尋ねた紀行である。雨律が同行している。だいたいの道順は細江・高浜・高岡・倉岡の峠・梁瀬のごとくである。

七　卯の花

文化十五年四月十一日から十八日頃まで、延岡（現・延岡市）に探勝した紀行である。南陽（息軒）が同行している。だいたいの道順は佐土原・新田・高鍋・津野・美々津・財光寺・延岡・美々津・高城・佐土原・蓮池・中村のごとくである。

八　ひとり旅

文政二年四月二十五日から二十九日まで、高岡（現・東諸県郡高岡町）に卯の花・郭公を尋ねた紀行である。同行者はない。だいたいの道順は涼松・細江・高浜・高岡・綾・本庄・跡江・大塚・加納のごとくである。

題簽欠。内題「尚白集」。墨付五二丁。粟州岡敏序（文化三年五月）・自序（文化三年）・錦江園主人吟水跋（文化三年秋）あり。奥書「文化三年丙寅秋　滄洲安井完子全述」。黒江一郎編『安井氏紀行集』（昭和三十四年刊）に翻刻あり。

四　二日酔　一巻一冊。一五・八センチ×一五・二センチ。共表紙。外題「二日酔」。墨付一八丁。自序あり。巻末の少部分と奥書を欠くが、次の『豊の秋』の冒頭に「佐土原に遊しハ水無月のはしめなりしに……」とあるので、同じ文化十三年の六月の成立とみなし得る。

五　豊の秋　一巻一冊。一六・五センチ×一七・〇センチ。共表紙。外題「豊の秋」。墨付一〇丁、遊紙一丁。自序（文化十三年閏八月）あり。奥書「文化十三丙子九月記　滄洲」。

六　梅か香　一巻一冊。一六・〇センチ×一六・八センチ。共表紙。墨付一四丁。外題「梅か香」。奥書「文化十有四年正月　滄洲録之」。

七　卯の花　一巻一冊。一六・〇センチ×一六・三センチ。共表紙。外題「卯の花」。墨付二六丁、遊紙一丁。奥書「文化十有五年寅四月　稽古堂滄洲」。

八　ひとり旅　一巻一冊。一六・七センチ×一六・九センチ。共表紙。外題「ひとり旅」。墨付一五丁、遊紙一丁。奥書「文政二年四月　稽古堂主人滄洲記」。

九　温泉記　一巻一冊。二五・一センチ×一七・一センチ。紺色表紙、題簽左肩「温泉記」。内題同じ。墨付一四丁、遊紙二丁。長男淳（清渓）の序（文政三年九月）、二男正（息軒）の跋（文政三年九月）あり。奥書「文政三年庚辰之秋九月　稽古堂滄洲記焉」。本書のみ別筆。

一〇　梅見噺　一巻一冊。一六・〇センチ×一五・九センチ。共表紙。外題「梅見噺」。墨付八丁、遊紙一丁。奥書「文政五年壬午閏正月　滄洲記」。

次に、各紀行の概要を記す。

一　昼寐の友

寛政八年四月十一日より十三日頃にかけて都於郡（現・西都市都於郡町）の古跡を尋ねた紀行である。同行者については「友とち四人五人」とあるが、不詳である（「白圭」は同行者か）。だいたいの道順は江平・広原・岩爪・都於郡・佐土原・久峯のごとくである。

二　米良の見塩

享和二年三月十九日より二十四日まで米良山（東諸県郡の釈迦岳・掃部岳などをさすか）の佳景を尋ねた紀行である。同行者は長倉風説・宇都宮南海・日高五明で、外に「調度持二人三たり」を伴っている。だいたいの道順は生目・穆佐・高浜　高岡・本庄・籾木・米良山・右松・都於郡・佐土原・久峯のごとくである。

三　尚白集

文化元年四月十日、君命によって出立、江戸に赴き、文化三年六月三日、帰家するまでの、滄洲の江戸勤務、京都遊学の記念というべき紀行集である。同行者の記載はない。江戸へは、吾平津で末吉丸に乗

その二は、安井文庫の蔵する、滄洲関係の俳諧伝書である。まず『俳諧会式伝』と題する写本一冊がある。大本で共表紙の八丁。内題「俳諧本式略式平会式大概」、奥に「文政二年己卯二月写之原本太田三圭所持也　滄洲」と記す。いま一つは『誹諧秘伝集』と題する写本一冊。横本で共表紙の一八丁。玄妙の発句・附句八躰などに始まるが、次第に連歌に及び、和歌の秘伝に至って、奥には「右三鳥三姫大事寛政第八丙辰年十二月十六日従日高吟水先生伝授之　干時寛政九丁巳孟春十八日書　大雅堂」「比一冊ハ錦江園の主日高吟水先生より伝授……」などと記す。大雅堂が滄洲の号かは不明だが、滄洲周辺の人物であることは間違いない。吟水は滄洲の叙父で、既述の如く、滄洲は多くの教導を得たようだ。

その三は、同じく安井文庫に蔵する、滄洲の詩稿である。次に列挙してみる。

『滄洲詩稿』　写大一　墨付三九丁
『詩稿』（内題「七言律」）　写大一　墨付三七丁
『詩稿』（内題「五言律」）　写大一　墨付三一丁
『五七絶』　写大合一　墨付九三丁
『限時百詠』（内題）　写大一　墨付一七丁　文化九年壬申夏六月の自序あり。

いずれも大冊であり、収録作品も多くて、滄洲の文事が、やはり俳諧より漢詩に重きを置くことが知られる。

なお、安井文庫には、『滄洲随筆』と題する写本一冊（大本、墨付二六丁）があるが、紹介は他の機会に譲りたい。また『鶏肋集』と題する一冊も目録に載るが、寓目し得ていない。

ここで滄洲の俳号等にふれると、寛政から享和にかけて緑竹園（あきの名残・米良の見塩）、文化から文政にかけて稽古堂（卯の花・ひとり旅・温泉記）を称していたことがわかる。最初期の『昼寝の友』の署名には、「蘭室（堂カ）」（陰刻）「朝□（難読、完カ）」（陽刻）の二印を用いている。

三

最後に、ここに翻刻紹介する紀行について説明する。まず書誌を記すと、次の通り。

一　昼寝の友　一巻一冊。一五・七センチ（縦）×一一・四センチ（横）。共表紙。外題「昼寝の友　全」。墨付一五丁。奥書「寛政八丙辰夏四月中旬　安井滄洲記焉」。表紙と一丁目表に同一印記（三字）あれど難読。滄洲自筆、以下同じ。

二　米良の見塩　一巻一冊。二三・八センチ×一六・八センチ。共表紙。外題「米良の見塩」。墨付二五丁、遊紙一丁。自序あり。奥書「享和二春三月　緑竹園主人滄洲記」。

三　尚白集　一巻一冊。二二・六センチ×一七・一センチ。金茶表紙。

思ひをも添て歯黒を付初る　三笑
もの書玉わぬ神を恥らん　三圭
筆の跡残ルも床し名所に　滄洲
羊を畜て仙人の真似　哥盛
独弁を苔むす岩に打明て　三圭
三年の辛抱にくら立　滄洲
月の客奥の細道しるへせん　雨律
風流の看板に萩垣　睢水
雁かねも清らかなりし鳥井前　三笑
葭簀に掛る名物の蕎麦　三圭
かしましう打手を三弦に引取て　雨律
石も磨たやうな玉川　滄洲
尚留る花の匂ひハ消やらす　哥盛
谷の戸明て経をよむ鳥　執筆
右

追禅　中埜連中

色かへぬ松をうらやむ別哉　史稽
後の香ハ薬に高し菊の花　哥盛
人去て残れる菊の哀さよ　滄洲
逝人の為にやかなし秋の風　松径
咲残る色香淋しや菊畠　成孚

巴国先生ハ誹諧の道に心をゆたね、万物の艶かなるを高吟に楽しまれし人物たりしか、老少の定なきならひにや、行秋の露を消給ふ事をいたみて、

月の雪法りのかなめや秋の花　和鴨
人少て菊見も秋のこゝろ哉　吟水
吹送る弘誓の船やあきの風　木原如来
手向草指にぬれけり袖の露　同梅里
菊の香や消て甲斐なき庭の面　岩切一風
入月に其伝頼む弥陀の号　同文貫
道草はいつ色かへて野、錦　熊野遊夕

跋

今年辛酉の秋の名残を、一期の秋の名残とし給ふ巴国先生を悼、諸好士の玉吟数章有を、猶子雨律子小冊となし、序を予に示して謂て曰、さらぬたにかなしき秋の名残なるに、かゝる秋の名残のかなしさにあといふへくもなけれハ、此集を号てあきの名残といわん、可ならんや、予か曰、可ならん〳〵、嗚呼悲ひかな、秋の名残、是をもてその霊を祭らハ、千部の経にも増りぬべしと、秋の名残に筆を揮ふて、拙き一辞を添る事、しかり。

緑竹園

註三　黒江氏著『安井息軒』八一頁には「安東氏」とある。
註四　註二に同じ。
註五・「安井滄洲先生」は朝秀より「世々清武中野に居る」とする。
註六～九　註二に同じ。
註一〇　黒江氏著『安井息軒』九〇頁、森鷗外著『安井夫人』は「姉」とする。
註一一　若山氏著『安井息軒先生』七・八頁所載のものに依った。

二

滄洲の文芸活動を伝える資料はさほど多くない。その中でも、ここに翻刻紹介する紀行文一〇点は、俳諧・漢詩・狂歌などを数多く収める点でも、その三つのジャンルを併行的に営む、地方文芸生活の実態を伝える点でも、きわめて興味深い資料群と思われる。

この紀行類のほか、寓目した滄洲の文芸資料は次の通りである。

その一。享和元年刊の均下亭矢野雨律編・錦雨齋巴国追善の俳書『あきの名残』に寄せた俳諧作品と跋文。次に「追善誹諧之歌仙」と題した同座の歌仙一巻、滄洲の追悼句を収める「追禅」発句の部、および跋文を翻刻して紹介する。（翻刻本文は、大内初夫氏書写のものによった。）

追善誹諧之歌仙

松高し月のひへつく後影　巴国
なかめ淋しき残菊の庭　雨律
関守の窓半分に冬待て　三圭
夜昼となく水ハ音信　雎水
海山の千里の外を商ハせ　三笑
訛覚て上る学問　滄洲
あとさきの今朝ハ隠るゝはつ冠　哥盛
数寄屋を出て改る礼　三圭
入船に文の噂をまち設　雨律
金よりも尊きハ傾城　三笑
鄙ミやこ雪も模様をふり分て　雎水
月吹はらす木枯の跡　哥盛
西行に似たる和尚か歌を詠　滄洲
士の胸さくり見る馬士　雨律
うそこわい道雷をちからにて　三圭
日の照方へ出る松原　雎水
はやそゝろ花に世帯を打任せ　雨律
囀りに悟りたる唐音　滄洲
足軽うたハるゝ春の下向列　哥盛
土産の虎を孫に狩する　雨律
酔た後毎も精進ものに好　雎水
大坂て直打せん冷風　滄洲

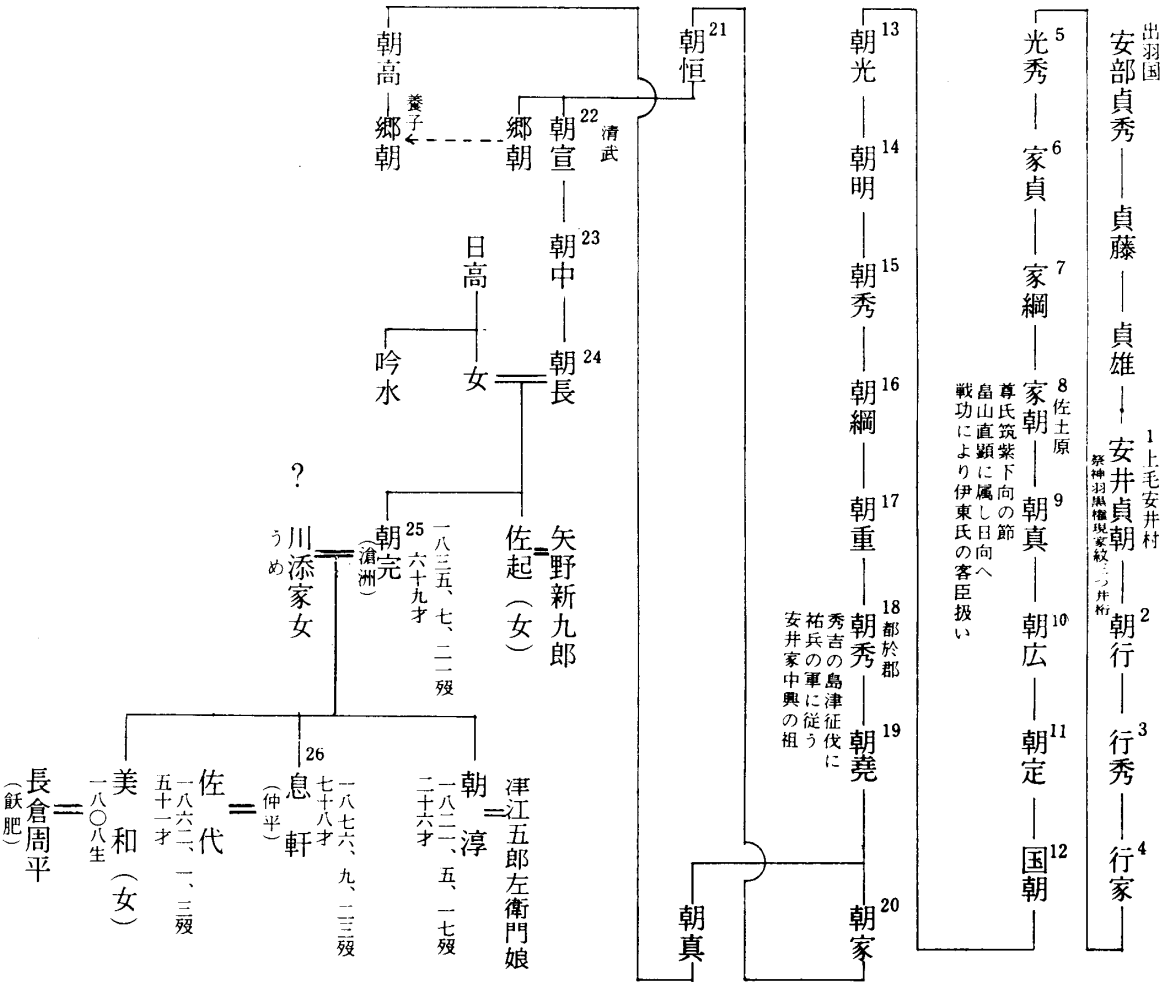
天保元年（一八三〇）六十四歳の時、飫肥の藩校振徳堂を修復して、儒官を増員することになったが、滄洲は特に抜擢されて総裁となり、同時に息軒も助教に任命された。（黒江氏著『安井息軒』八五頁）飫肥に遷らせ、家を賜い、秩を進める等、恩礼は異数といってよかった。滄洲は喟然として嘆じた。「頽齢幾も無し、以て洪恩に報ずる無し、独り祖先の遺嘱を償する、これ喜ぶべきと為すのみ。」と。酒を設けて曽祖父朝宣を祭った。（『太平山表』卄）

滄洲は以前から中風を病んでいたが、移住の翌年再発して次第に悪化し、歩行の自由も意の如くならず、学堂教授の方も思わしからず、養生に努めること五年に及んだ。病中些かも憂色なく、盛夏と雖も常に炉辺に座し、手より書籍を放さず、来訪者あれば、雅俗となく接待して、病を忘れたるかの如くであったが、病勢次第に衰弱を示し、終に天保六年（一八三五）七月二十一日、六十九歳を以てその生涯を終った。藩を挙げて痛惜し、門生婢僕に至るまで声を挙げて泣かざるはなかったという。飫肥安国寺墓地に埋葬した。（黒江氏著『安井息軒』八五・八六頁）

註一　若山氏著『安井息軒先生』二〇四～二〇六頁所載のものに依った。

註二　安井息軒百年忌祭奉賛会編『安井息軒』（昭和五十年九月二十三日刊）二四・二五頁所載のものに依った。次に、それの滄洲の子の代までを記す。

安井家の系図（安井四郎氏・泰氏宅に伝わる系図による）



し、暇を乞うて、北筑（福岡周辺）で治療した。（『太平山表』（レ））

寛政八年（一七九六）、長男朝淳が生まれた。（黒江氏著『安井息軒』八九頁）　時に滄洲二九歳である。滄洲の妻は系図[註八]に川添家女うめとあるが、資料がないので、いつ結婚したのかもわからない。

寛政十一年（一七九九）、次男朝衡（幼名順作）が誕生した。

享和元年（一八〇一）、滄洲は巴国追善集『あきの名残』の跋文をしたためている。集中の「追善誹諧之歌仙」「追禅」に滄洲の句がみえる。（「追善誹諧之歌仙」「追禅」「跋」は後に翻刻して示す。）

享和三年（一八〇三）に清武中野の文学に任ぜられた。（「安井滄洲」）

文化元年（一八〇四）三八歳の三月、江戸勤務となったが、余暇には当時古注学で名を知られた古屋昔陽について疑義を質した。（黒江氏著『安井息軒』八四頁）　役竣りて帰るの際、療養を名として京師に留まり、皆川淇園の門に入り、徂徠派の学を修むること一年にして帰る。（「安井滄洲先生」）

同三年（一八〇六）六月帰国し、従前通り塾を開いて子弟を教えたが、日に増し盛大となった。（黒江氏著『安井息軒』八四頁）　この年、『尚白集』がなった。

文化四年（一八〇七）、治水使となる。（『太平山表』（ナ））

系図[註九]によれば、文化五年（一八〇八）長女美保が誕生した。[註一〇]

文化十年（一八一三）、教授となる。邑に教授の在ること、これに始まる。（『太平山表』（ラ））

文政三年（一八二〇）、数え年で二二歳になった次男朝衡（字は仲平、号は息軒、半九陳人、葵心子）を大阪に遊学させた。

文政四年（一八二一）五月、長男朝淳（通称文治、字士朴、号清渓）が没した。『清渓遺稿』[註一一]序に次のように記されている。

歳無不病之月、月無不嘔之日、如是者四年、齎志以没、没之年実二十有六而已

初秋の頃、息軒がそのために帰省している。

文政七年（一八二四）、料兵使を兼ねることになった。（『太平山表』（ム））　この年、息軒を今度は江戸に遊学させている。息軒は古賀侗庵の門を介して、昌平黌に入寮した。

文政九年（一八二六）六月、滄洲の妻が五十八歳で没した。（黒江氏著『安井息軒』八八頁）　この年、矢野荘左衛門儀之・平島八郎兵衛易直・高橋藤蔵元吉等を始め、七八人の門生が発議し、清武村字中野に学問所を創立しようということになり、九月、藩に願ひ許可を得た。（若山氏著『安井息軒先生』一〇頁）

学問所は翌年（一八二七）正月、土工を起し、十月落成した。藩主に従って帰国した息軒が、これに明教堂の名を与えた。

なお、この春、息軒が妻を迎えた。森鷗外著『安井夫人』の佐代である。

こうして、滄洲父子は後進を指導すること数年、学問の熾なること、飫肥の其れを凌がんとした。（若山氏著『安井息軒先生』一〇・一一頁）

その息、朝中は樹芸につとめ、ために生業は息んだ。（『太平山表』ト）　朝中が樹芸に志した背景を語る資料はない。

朝中の孫が滄洲である。滄洲、諱は完、字は子全、平右衛門と称し、滄洲はその号である。明和四年（一七六七）九月三日、誕生した。（黒江氏著『安井息軒』八二頁）　父、朝長、母は日高氏である。（系図[註六]）両親とも資料に乏しいので、滄洲誕生の時の年齢その他不明である。兄弟には、後に矢野新九郎に嫁す姉佐起がいた。（系図[註七]）

六歳の時、父の朝長が死去したので、母・姉と共に寂しい生活を送っていたが、幼にして英敏、学を好んで、叔父日高源助（吟水翁）について句読を学んだ。附近の児童が遊戯に熱中している時も、独り離れて静座し、読書に励むという風であった。（黒江氏著『安井息軒』八二・八三頁）　滄洲に句読を授けた日高源助は俳諧を嗜んでいる。（後述）

十五、六歳の頃、附近の村に一人の卜筮家がいて、人の禍福利害を、不思議に言い当てるので評判になっていた。某日、少年滄洲は之を見に行ったが、少年の異様な眼光に打たれた筮者は、

この人の前では、言い当てることが出来ない

と言って逡巡したので、人々はこの少年に、何となく畏敬の念を抱くに至った。（黒江氏著『安井息軒』八三頁）

既冠、専ら博渉に務めた。家が典籍に乏しいので、書史を挾むと聞けば、遠くても、必ず往って、これを借覧した。（『太平山表』ワ）

しかし、滄洲は嘗て疱瘡を患い、一目を眇んでいた。母は彼が失明することを恐れ、それが彼女の辞色にあらわれるので、滄洲は夜間の学問を廃すること累年に及んだ。（『太平山表』カ）

このような青年滄洲を郷人がどのように見ていたか、これについて次の二つの文章を紹介する。

時人皆之を笑ひ、学問は唐土の事なり、この邦に生れてはこの邦の俗に従ひ弓馬を学ぶに若かずと云ひ、其来るを見ては孔子来る孔子来ると罵る、先生少しも意とせず。（『宮崎県大観』所収「安井滄洲先生」）

和田郷左なる人は特に好意を寄せ、某日、この少年を侮辱する者を見て、目を瞋らし刀を按じて之を斬らんとしたので、無法者は漸くにして逃れることが出きたという。（黒江氏著『安井息軒』八三頁）

まとめれば、好意を寄せる人も無くはなかったものの、滄洲は、大半の郷人には異邦人であった。

飲肥はその地が海西に僻していたが、清武は更にその下邑であった。人々は学問の何たるかを知らない。滄洲は嘗て慨然としてひとりごちた。

「生於斯世、當為斯世之用、然世不我知、今日所為、独有育人材耳。」と。（『太平山表』ヨ）

かくて、生徒を集めて、これに教授することが始まった。村長はこれを選し、正庁に推薦して、学校とした。清武に学術が漸く興ったのである。（『太平山表』タ）

滄洲の視力を母が気遣ったことは前に記したが、このころ目疾頗る劇

剛直、非處叔世之道、謹戒之、不肖衡正垂泣俯聽、俄聞旁人哭、驚起則既瞑矣、

（ア）嗚呼生不能盡其養、没不能奉其教、喪服纔除、果取憎於郷人、遠去墳墓以来此都、荏苒二十有七年、㉜而春秋窀穸之事、亦未能有発揚潛徳百分之一、中夜而思之、泣涕沾襟矣、文久壬戌、秋七月、幕命下藩、召奉朝請、十二月拔昌平学儒員、元治甲子春二月、遷白川令、下肖衡、才短学浅、無能立於世、而恩遇至此、豈非先君子余慶之所延邪、是歳六月、将赴任、地遠職劇、仄省有蹙焉、乃書其所由、謹表之塋前、庶幾有以発揚先徳而少償不肖衡罔極之罪也、元治紀元甲子夏六月、㉝

〔校異〕①「姓日下部」ノ四字アリ　②「上毛」　③「居安井村、因氏焉」ノ七字アリ　④ナシ　⑤「光台」　⑥ナシ　⑦「五伍長」　⑧「薩人降、公以功封飫肥」ノ九字アリ　⑨ナシ　⑩「能」ノ一字アリ　⑪「生文寛府」ノ四字アリ　⑫　⑬「妖人」　⑭「自」ノ一字アリ　⑮「恐」　⑯ナシ　⑰「四」　⑱ナシ　⑲「宅」　⑳ナシ　㉑「尽」　㉒「於」　㉓「游紀」　㉔ナシ　㉕「修」　㉖「某」ノ一字アリ　㉗ナシ　㉘「是」ノ一字アリ　㉙「調」　㉚「因」　㉛「権威」　㉜ナシ　㉝「不肖衡」ノ三字アリ

次に、作者及びその周辺について記す。ただし、『太平山表』に重なるところが多いことを最初にことわっておきたい。

安井家の先祖は系図[註二]によると「出羽国安部[註三]貞秀」に溯る。

上野介貞朝に至り、上州廐橋附近安井村に居住し、安井を姓とした。（黒江氏著『安井息軒』八一頁）

建武三年（一三三六）、足利尊氏が九州に走った時、貞朝の七世の孫、家朝が畠山義顕に従って、日向に至った。翌年、伊東祐持（光台公）に見え、右松邑を賜って、遂に、伊東氏の臣となった。（『太平山表』（ハ）

天正五年（一五七七）、伊東義祐（三位入道、金柏公）は薩摩の島津氏に破れ、大友氏を頼って豊後に亡命したが、朝秀はまだ年少の為、従うことが出来なかった。のち豊臣秀吉が島津氏を征伐し、祐兵（報恩公）が起用された時、朝秀は早速軍門に駆けつけたので、公は喜んで隊長に任命した。秀吉が奈護耶に築城した時は、公はその徒を率いて参加し、加藤清正は朝秀に手書を与えてその労を賞した。朝鮮の役にも従って抜群の功をたて、また慶長五年（一六〇〇）、薩摩の島津勢と宮崎、佐土原の間に戦って功労があった。（黒江氏著『安井息軒』八一・八二頁）　朝秀は系図[註四]に「安井家中興の祖」と記されている。

その曽孫朝恒は学行あり、兵法に精通していた。（『太平山表』（ホ）

その子、朝宣はよく先緒を修めていたが、官命で軍志を清武で講じることになり、遂に住居を清武に移した。[註五]徙居について朝宣は鬱鬱として志を得ないという風であった。そして、子孫に望むに、飫肥に遷ることができれば、これ以上の孝行はないと言った。（『太平山表』（ヘ）

(リ)男即先君子也、
(ヌ)年甫六歳、慈雲府君即世、先君子独与母姉居、
(ル)幼有異稟、好学、受句読於舅氏吟水翁、群児戯嬉無度、先君子独凝然跪座、
(ヲ)年十五六、近邑有巫⑫、為人説禍福利害、往往奇中、先君子往観焉、⑬巫蹙然色沮曰、斯人在焉、吾不能言、人漸異之、
(ワ)既冠、専務博渉、而家乏典籍、苟有挾書史者、雖遠必⑭往借之、
(カ)然嘗患痘眇一目、母氏⑮憂其喪明、形於辞色、為廃夜学累年、
(ヨ)飫肥僻處於海西、清武又為其下邑、人不知学、嘗慨然曰、生於斯世、当為斯世之用、然世不我知、今日所為、独有育人材耳、
(タ)於是聚生徒教授、邑宰韙之、推正庁為校、学術漸興、
(レ)既而目疾頗劇、乞暇医於北筑、
(ソ)著尚白集一巻、
(ツ)文化甲子、役于江戸、時年三十八、暇則従昔陽古屋氏質疑、役竣、⑯往京師、従游於淇園皆川氏、
(ネ)丙寅⑰六月帰、生徒益進、
(ナ)丁卯為治水使、
(ラ)癸酉命為教授、邑之有教授、自此始矣、
(ム)文政甲申兼料兵使、
(ウ)丁亥、請建郷校、学政大振、人材輩出、
(キ)天保庚寅修国学、増置儒員、特抜先君子為教授、命遷於国都⑱、賜家⑲進秩、恩礼異数、時年六十四、先君子⑳喟然歎曰、頽齢無幾、無以報洪恩、独償祖先遺嘱、是為可喜耳、設酒祭仁庵府君、
(ノ)先是先君子患疝、至明年宿疾復動、難於行歩、以故不能致力於学政㉑、
(オ)優養五年、遂以前症而没、実天保乙未、閏七月二十一日也、距生明和丁亥閏九月三日、得年六十有九、葬㉒于飫肥城東太平山之塋、
(ク)娶於同族、生二男一女、
(ヤ)伯名淳、字士朴、号清渓、有俊才、年二十六先没、
(マ)女適長倉氏、
(ケ)仲即不肖衡也、
(フ)所著有古今体詩六巻、及紀㉓游若干巻、
(コ)先君子質直好義、見威権燻灼者、若恐㉔将為所汙、以故終身㉕陸沈、
(エ)然其待人則極寛、有喜面折人者、或以告曰、㉖佳士也、所恨訐以為直、先生既与之交、何不戒之、先君子笑曰、彼才学無足言、其可取者、独以直諒耳、若又改之、猶蕃椒去辛、果何所用也、又有憂親姻乞貸者、㉗亦以告、先君子従而賀之、其人慍曰、以先生歯徳俱尊、冀有以誨焉、而反賀之、㉘慢小人也、先君子曰、貧富天也、子不幸生於貧人之家、乞貸為生、将如之何、今親姻貸於子者、以子力足㉙賙之耳、乃生民之至幸者、是不亦賀邪、其人頓首而謝、遂以恵人聞、其㉚随事施教多此類也、㉛以故人益尊信之、及没闔藩痛惜、而門生婢僕皆慟哭失声、雖威権燻灼者、亦自尤置之散地也、
(テ)将没召不肖衡曰、我年幾七帙、汝亦粗能承家学、死無所恨、但汝性

安井滄洲紀行集

付・志濃武草

――南九州の国文学関係資料（五）――

塩谷充夫
福井迪子
橋口晋作
（執筆協力者）田中道雄

解説

ここに南九州の国文学資料の一として翻刻紹介するのは、安井文庫（宮崎県宮崎郡清武町教育委員会所蔵）に収まる安井滄洲の紀行一〇点である。滄洲は儒学者安井息軒の父で、巻中それぞれの旅になった俳諧・漢詩・狂歌が記されており、化政期の地方文学作品として注目に価する。

一

従来滄洲についてふれたものには、若山甲蔵著『安井息軒先生』（大正二年十二月二十六日刊）、黒江一郎著『安井息軒』（昭和二十八年八月一日刊）、『宮崎県大観』第五輯「人物及事業」所収「安井滄洲先生」（大正四年六月二十四日刊）、『清武町史』所収「安井滄洲」（昭和三十五年五月五日刊）などがあるが、いずれも『太平山表』によっている。したがって、ここでは、まず最初にその全文を、『息軒遺稿』（明治十一年八月二十八日刊）巻之四所収の本文によって紹介しておくことにする。

なお、滄洲の墓表に記されたもの[註一]（若山氏著『安井息軒先生』所収）との校異を後に記す。（便宜上イ～テに分けて改行した。）

（イ）先君子、①諱完、字子全、号滄洲、
（ロ）先世上野介貞朝、食邑②於毛之廐橋、③世④處関東、
（ハ）建武丙子、足利尊氏奔筑紫、貞朝七世孫家朝、従畠山義顕至日向、
明年丁丑、見⑤於先君祐持公、賜右松邑、遂為伊東氏臣、
（ニ）家朝十世孫曰朝秀、天正丁丑、薩人陥都於郡、三位公奔⑥西豊、朝秀
幼不能従、及豊⑨太閤征薩、世子報恩公属元戎、朝秀走謁⑦軍門、公大
喜、抜為隊長、⑧従征朝鮮、慶長五年、戦于宮崎佐土原之間、並有功、
（ホ）曾孫柳翠府君諱朝恒、有学行、精通韜鈐、
（ヘ）生仁庵府君諱朝宣、能修先緒、官命講軍志於下邑清武、遂徙居焉、
鬱鬱不得志、曰我無望於子孫、唯⑩内遷於国都、孝莫大焉、是為先
君子之曾祖、
（ト）⑪君諱朝中、勤於樹芸、生業以息、
（チ）生慈雲府君諱朝長、娶日高氏、生一男一女、